九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

緊急シンポジウム 生活体験から「17歳」を問う！

https://doi.org/10.15017/9028

出版情報：生活体験学習研究. 2, pp.109-141, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

緊急シンポジウム
生活体験から「17歳」を問う！

日　　時：2000年６月25日（日曜日）午後２時～５時

場　　所：大名公民館

コーディネーター：上　野　景　三

シンポジスト：猪　山　勝　利

森　山　沾　一

西　村　喜　文

窪　田　貴　子

コメンテーター：横　山　正　幸

日本生活体験学習学会誌　第２号　109―141（2002）

緊急シンポジウム
生活体験から「17歳」を問う！

日時：2000年６月25日（日曜日）午後２時～５時
場所：大名公民館
コーディネーター：上　野　景　三
シンポジスト：猪　山　勝　利
森　山　沾　一
西　村　喜　文
窪　田　貴　子
コメンテーター：横　山　正　幸

横山

日曜日、そして選挙の投票日というたいへん、なんか雰囲気としてあわただしい日なんですけども、そういった中、この生活体験学習学会主催のシンポジウムにおいでいただいて本当にありがとうございます。今日は生活体験から17歳を問うという、ちょっと変わったテーマでのシンポジウムです。主催がまず生活体験学習学会、おそらくこの学会何だろうとお考の方もいらっしゃると思います。最初にその辺を説明申し上げたいと思います。子どもたちはご存知のようにみんな大きな、ロマンチックに申し上げるんじゃなく事実としてですね、たくさんの可能性をもって生まれてきます。しかし、あとからいろいろと実態が出てくると思いますが、残念ながら、今は夢いっぱいという感じではない状態に入ってきています。そういったことに対していろんな考え方がありますけれども、私たちは生活体験が非常に重要じゃないか、親子のあり方にしても、結局子どもの生活にはねかえる。教室、学校のあり方も全部生活ですね。そういったことで、10年ほど前でしょうか。飯塚市の隣の庄内町に生活体験学校というのがつくられたわけです。それはどういう学校かといいますと、これは庄内町立なんですけども、熱心な方々の支えの中で今日までいろんないろんな活動をしてきてるんですが、家庭でできる生活、すべき生活ですね、朝ご飯を食べる時間に食べる物をちゃんと食べて、そして勉強に行って、それから帰って遊んで、あるいはお手伝いをして、そして寝る時間に寝る、この当たり前の生活がなかなか難しい。そういった状況の中で地域に、生活する場をつくったわけですね。で、そこには畑があります。それから動物を少し飼ってます。子どもたちを募集をします。で、１週間ほどなんですが、子どもたちがそこに泊まって、５年生６年生、だいたい10人単位ぐらい。その子たちがここで自分たちでご飯を作ったり、お風呂を沸かしたり。きょうだいでない子どもたちが一緒に宿題をしたりして、朝は学校に行く。で、帰ってきたらまたそれをやる。家庭が難しくなっていることをここで少しやってみて、そして家庭、お母さんお父さん、こういう風にやれば子どもたちはこんなふうになるんですよ、ということを学んでいくわけなんです。そういう場として生活体験学校がつくられたわけです。この考え方が今全国に広がっております、福岡県からですね。文部省の中教審の中でも出てきます。そういった中で、私たちは縁あってその学校に関わらせていただいてきました。生活体験と今よく言いますが、これもやっぱり学問的にもですね、きちっとおさえる必要があるんじゃないか。何が生活体験で、どの時期にどういうことをするのが大事なのか、ですね。単なるイベント的な体験でだけではいけないわけです。で、そこで前から話がありましてですね、仲間、いっしょに取り組んでいるメンバー達の中から、学会をつくろうと声があがりました。生活というとなんか学術的じゃないんですけども、やっぱりそれなりに考えてもらうには学会をつくる、この問題について言及する若い人たちが育ってなければいけない、ということで、この３月に学会を立ち上げました。で、特徴がありまして、１つは、社会教育とか生涯学習関係者ですね、あるいは私のように発達心理学・児童心理学、あるいは臨床の方、あるいはお医者さんもおられます。それから歯医者さんもおられます。それから福祉学の先生、あるいは食物栄養学の先生方もおられます。で、学際的な性格をもっている。生活は全部関係しています。それからもう１つは、学者だけではなくて、実際に子どもたちと取り組んでいる。全国にいっぱいおられます。そういった方達と手をつなごうといったことで、実践者が各方、そういった形でですね、要するに研究的な面と実践的な面、そこにいっしょになりながらですね、子どもたちの豊かな体験、本当の体験というものを育てるようする、子ども

たちの発達、健全な事実を普及するようにやっていきたい、ということで説明は長くなりましたけれども、この生活体験学習学会を今年３月に立ち上げたというわけです。今、様々な活動計画を立てているところなんですが､先日の理事会のほうで､先日から問題となってます、思春期の子どもたちの問題ですね。17歳を象徴する問題について、我々の生活体験学習学会の立場からですね、いっしょに考える場をつくろうじゃないかということが、今日登壇されている長崎大学の猪山先生から提案がありました。実は10月ということだったんですが、論議の結果、いや～やっぱり早いほうがいいな、選挙の日ではあるけれども今日やろうということになりまして、場所があいれふとかアクロスとかいろいろ交渉したんですが、もうどこもありませんと。申し訳ないことですが、狭い場所なんですけどもここを貸していただくことができました。ということで今日の開催ということになったわけです。さて、今日のテーマに関してなんですけども、生活体験、皆さん方あまり聞き慣れないかもしれませんが、ちょっとこういうことを申し上げときたいと思います。私の尊敬する写真家なんですが、田沼さんという方がこういった本を出してます。『地球星の子どもたち』そして見られた方もいらっしゃるかもしれません。世界百数カ国をまわって子どもたちの写真をとっております。そしてこの方が最近出さったもうひとつ大きな本があるんですが、『人間万歳』という本の中でも述べているんですが､「目で見れば貧しくとも自然の中でおおらかに育っている子どもたち、この目はきらきらと輝いている。しかしながら反対に物質的には豊かでもテレビゲームや受験勉強で部屋に閉じこもっている子どもたちの目には目の輝きがない」､こういったことを言っているわけです。百カ国を見てですね。さらにはこう言ってます。「子どもたちが育っている。その生育の土台は遊びである。そのことを子どもたちを見て痛切に気づく場を教えられた」という書いています。残念ながら日本ではほとんどの子どもたちの遊びという生活体験はありません。私たちは今日、一番本当はいい時期、もがきながらもですね、こう悶々としたりいろいろあるわけなんです、青年期、17歳、18歳。しかし、それでも自分をコントロールし、羽ばたこうとしてるいい時期なはずなんですね。その子どもたちがなぜこういうふうな状況になってきてるのか、私たちはどういったふうにこれから対応を考えていったらいいのか。こういったことを生活体験という側面から、皆さんとともにですね､論議をしていきたいと､こういうふうに思っています。今日は司会を佐賀大学の上野先生がしてくださいますが、シンポジストの皆さん方が話すだけではなくて、討議の時間を用意しておりますので、皆さん方からもどうぞご意見を出していただいて、実り多い会にできればという風に思っております。長くなりましたが、始まりの挨拶とさせていただきます。皆さん、どうもありがとうございました。

全体司会者

それではコーディネーターは、先ほどご紹介されました佐賀大学助教授の上野先生です。先生どうぞよろしくお願いいたします。

上野

みなさん、こんにちは。ただいまから緊急シンポジウム「生活体験から17歳を問う」を始めさせていただきたいと思います。先ほどこの学会の会長でいらっしゃいます横山先生からの説明がございましたけれども、準備の期間が１ヶ月くらいとたいへん短い期間で今日を迎えております。会場についても無理を言いましてこちらを使わせていただいております。それから入口付近には立っておられる方がいらっしゃいますので、どうぞ中のほうに少しずつお進みいただいて少し移動していただければと思います。どうぞみなさんご協力よろしくお願いいたします。

（全員席を少し移動）

どうもありがとうございました。ご協力ありがとうございました。実は私ども、こんなにたくさんおいでいただけると予想してなかったもんですから、椅子は70くらいで大丈夫じゃないかと思っておったんですけれども、ほんとに椅子の余地もない100名を超すたくさんの方々が、今日はお集まりいただいてほんとうにありがとうございます。

最初にちょっとお尋ねしたいんですけども、私ども今日はどういう方がお見えになるかということは予想つかなかったもんですから。ちょっとお手を上げてお答えいただきたいと思います。皆さんの中で保護者の方…３・40くらい。幼稚園・保育園先生…20名くらい。小学校の先生…２人。中学校の先生…いらっしゃる。高校の先生…若干名。教育行政関係の方…何人か。その他の方…学生さんですね。それでは今、保護者の方をはじめ、就学前の子どもさん相手のお仕事の方たくさんいらっしゃるかと思いますけど、このシンポジウムをなぜこのように緊急に開催したかといいますと、私が所属しております佐賀県で、バスジャック事件が起きました。５月の３日、４日にかけてのことでありましたけれども、この事件はバスジャックが象徴的な事件というだけではなくて、連続した事件の一つでありましたね。つい先日でも岡山で事件が起こりその前は沖縄でも起こり鹿児島でも起こりというふうに続いているところです。このような事件を見るたびにどこで起こってもおかしくない、また佐賀県のバスジャック事件の際には、少年の姿をテレビカメラがとらえた時に、同じくらいの子どもさんを持つお母さん方は、うちの子じゃないか？うちの子が遊びに行ってませんか？というふうに、我が子の所在を電話で随分確かめられたそうです。新聞記事を今日の資料の中にも入れておきましたけれども、そういうことが起きているわけですよね。このような事件の新聞報道などを見ておりますと、わりと大きな新聞報道が少年たちの心を読み解くという、心の風景を観察記事で取材をされておられるところが多いかと思います。そしてそれも精神医学関係の先生方のコメントなどがついているケースが多いかなあというふうに思います。けれどもこの心を読み解くっていうことはとても大切なことだと私思うんですが、その一方で心を読み解くだけではどういう問題が起きるかというますと、その少年の心を理解できなかった親は一体何をしていたのかと、その少年の心を受けとめることができなかった教師というのは一体どういう仕事をしてきたのかというような責任が追求されるだろう。そして、それを対策として行政の政策として打ち出していこうとしたら、スクールカウンセラー、カウンセリングの強化であるとか、また心の教育に代表されるような教育の在り方、精神的な面を重視ということだけが前面に出てきてしまうのではないだろうかというふうに思われるわけですね。カウンセリングの中の役割ってのは一見大事かと思いますけれども、心の持ちようだけではやはり解決できない問題ってのもあるんじゃないだろうかというふうに思っています。むしろ、このような問題を生みだしてしまった社会の在り様というもの、また学校の在り様というものを変えていこうという視点というものから、カウンセリング・心の教育だけでは出でこないというふうに思われるわけです。そこで、このような私どもの社会とか大人の関わり方というものを変えていこうとしたときに、その変える一つの視点というものが、この生活体験というキーワードだと思っているわけでございます。

この生活体験について、この17歳問題と関連して今日は４人の先生方にご提案していただくようにしております。向かって左側に座っておられる先生が長崎大学教授の猪山勝利先生でいらっしゃいます。そのお隣が佐賀県で臨床心理士をやっておられます、西村喜文先生でいらっしゃいます。そのお隣が甘木市子どもの文化ネットワーク代表でいらっしゃいます窪田貴子さんでいらっしゃいます。そしてその次が福岡県立大学教授の森山沾一先生でいらっしゃいます。そして最後に学会長でもいらっしゃいます、また今日はコメンテーターを務めていただきます横山正幸先生でございます。よろしくお願いします。それでは進め方ですけれども、この４人の先生方に最初お１人20分程度問題提起をしていただきたいと思っております。そして、問題提起をしていただいた上で横山先生に若干のコメントをいただいて、休憩に入ろうと思っております。後半の部分では皆さんがお日頃感じておられる問題点ですとか、またこの17歳問題に関わってのご意見などをいろいろ出していただきたいと思います。それを少し整理しながら各先生方からまたご意見を賜わりたい

と思っております。そういう進め方で進めさせていただこうかと思っております。それでは、トップバッターとしまして長崎大学の猪山先生からご提言をいただきたいと思います。

猪山

こんにちは。あの、立ってるとですね、つい講義調になりますので、座らせていただいてもよろしいでしょうか。時間もありませんのでさっそく内容に入らせていただきたいと思うんです。レジュメに書いてありますように、新たな少年期を作ろうというのが私の根本的な、今日皆さんに問題提起をさしていただきたいことなんです。実は５月の４日の日は、実は５年前頃から長崎大学の学生たちといっしょに不登校児のフリースクールを長崎駅前でやっておりました、高校時代から知っているんですけれども、包丁を持って、お母さんに切りつけた子を１ヶ月前に学生と私で対応しまして、よかったなあって言ってたのです。テレビをつけましたら11時ごろにNHKで事件があってたもんですから、それから寝れなくなってですね、朝も９時くらいまでずっとほんとになんていうか、皆さんもそうだったのではないかと思いますが、私ももう他人事ではないなぁと感じて、見ていました。で、見ながら、私自身は人生の第２の人間の危機は少年期と思うんです。最初は生まれてから、３歳くらいとよく言われますよね。これはやっぱり自分の足で立てないときに誰かのほんとに信頼されるやっぱり支えがあってだんだん自立していくわけです。ある意味では、私は10歳、今世界的には10歳といわれてますけれども、10歳まではある程度教師や親たちが支えてくるわけですけど、それまでに支えられたかの問題もあるんですがあるんですが、やっぱりそれから本当に自立していかなければならない人生第２の危機がこの10歳くらいからですね。今まではどちらかというと、その10歳の危機は日本の歴史を考えると、ある程度子どもは遊びとか集団とか家庭とか様々な経験をしながら学校とうまく重なってきました。特に日本の場合は、世界と比べてもそんなに大きくなかったのです。これが根本的に壊れ始めたのは1960年代、ちょうど高度経済成長の時からだと思います。とにかく学校の成績でいわゆるいい高校、いい大学、いい就職・企業にはいればいいという価値観が非常にワンパターン化して、だんだんだんだんみんなも忙しくなったこともありまして、従来の地域がだんだん希薄化し、したがってそこの子どもの場もだんだんなくなってきました。今日私露骨なことを言いますけれども、子ども会などの集団もそれに対応できなかった。そういうことで地域それから家庭の電化製品様々で子どもの場がなくなった、あとは学校だけ。また遊びの時間も塾とかそういうことで奪われる。本当の言葉でいう主体的な自立経験というものをつくるということが、ほんとに希薄になっていると思います。まぁそれで、特にはかつてはそっから落ちこぼれて成績が悪いとか、いわゆる経済的に恵まれなかったから盗みをするとか、これらは非行と呼ばれてたんですけれど、今いわれてますように、中学生の不登校なんかが問題になり、まぁいろいろな原因があるんですけども、小学生上学年の時は非常にいい子でしたといって私の研究室で泣かれるお母さんが多いんですね。つまり、悪いことをしないで、成績はクラスで５番以内と言われることですけれども。やがて実際に自立を迎えるときに、ほんと、様々な経験というよりか、成績よければだいたいの親はそんなに文句は言わないし、文句いわないどころか、経験を打ち消すような物を与えて部屋を与え、自分で立ち上がっていくというパワーをつける様々な取り組みをしないのです。昔はそんなに教育的ではなかったんですけども、逆に家も子どもがいないと、地域も実は遊びだけではなくて子どもに役割があったんですけれども、そういうことを通して子どもは実感をもって、自分を育てるという事ができたんです。ですから、中学生の調査をすると、よくテレビを見すぎだからああゆう人を殺す、テレビゲームをしたからといいますが、それが一番充実しているという子がいるんですよ。一般的に見たら転倒してると思うんです。漠然とした勉強、なんとなく親のお説教ともなんとも分からないような話よりも、一番実感があるといったりするわけですよね。だからテレビやテレビゲームの認識がそれを作るというか、この前非常に実感…、そこが濃密な経験をしている子どももおるわけで、さらにそれをもっとリアリティに実体験したいというふうになる子も結構増えていて、それはいわゆる逆にいい子だったから、人を泣かしたりすることもなかった。この思春期というのはやっぱ

り自分とも葛藤しながら生きていかないといけないのにそういうパワーを持てなくなってる。それがいろいろな刺激があると爆発するという状況が起こっていると思うんですね。原因ばかり言っててもしょうがないんです。私もぜひ皆さんと今日いっしょに評論や分析をもうする気にはなりません。それよりか、ほんとにただ抽象的なことではなくて具体的にどうするかを、今日話したいと思っています。やっぱり自立する、もともと不安定な時期ですね、皆さん自分で考えてですね、早い方もいると思うんですけれども、小学校上学年から中学生は実にですね、精神的にみんな不安定なときなんですね。不安定だからこそですね、ほんとは２つのことをしっかりしとかんといかんと思います。

１つは親密権といいますけども、友達とか家族がほんとに、新しい形で幼児のときとは違う形で支える、人間関係や場所として居場所になるということですが、はっきりいって長崎でも4000人の中学生調べまして、ほとんどが恵まれているから自分の部屋、家に帰ってくるだけで親子の会話なんてなんかいっしょに作業しない限りはそんなに生まれるはずがない。しかし、その家族の中で、あるいは家族が離れても地域とかや様々な活動をしてたら、体験をしてたらそれをめぐって関われるんですよ。そうじゃなかったら、勉強しとるか？友達はいるんか？この頃どうか？そういうことをいってかえって会話したために非行化するという事件も起こったり、茶化すわけではないんですけども、そういう点で、今中学生はほんとにですね、自分を理解してくれてないというのはあるのかということを思わないといけないんですね。変に100％自覚しているといわれることは自立度がない子どもですから、半分はそう思ってもらわないと。つまり反抗しない子どもは逆に大学とか社会人になったときに倒れるというのが多いんですね。大学も企業も特に優等生のところで不登校児が大学でも企業も起こり始めてます。そういった意味では反面はこの、反抗しないといけないんですが、もっと具体的な自覚を持つ、同時に支える人間関係そこで新しくできる必要はある、ただ乳幼児期の丸ごととは全然違うということですね。そういうことがまず１つ大事だと思います。

二つ目は皆さんよく考えたらもちろん学校の教師ということが非常にイメージが残ってると思いますけれども、今大人であった人は家庭とか地域、それからその場の中の友達関係のなかで様々な人間関係や体験をしたから皆さん自立してきてるわけで、したがってその場が必要なんですけども、地域が非常に弱くなってきている。家庭が…これを今日いいたいんですが、消費生活ということが非常に進んできて、子どもが消費するだけの存在になってつくっていく、自分が新しいものをつくって評価されるという様々な体験と、それから友達関係でさえ弱くなっていて、ですから親とか地域の人とか地域の青年とか高齢者とか、それは部分的に学校のボランティアとかくらいとしか付き合わないので、継続してないということが非常に大きいなと思います。その反面学校生活が非常に強くなっている。私も中学や高校の先生で学校の勉強をしないと将来ダメという教師はもっとも軽蔑しますけれども、学校の勉強だってきついのにさらに家でまであるいは塾まで追い込んで、非常に身体が弱くなっている、ストレスが溜まっている。その中で自分がなんであるかますます分からなくなっている子どもが非常に多いのです。もちろん学校は私はほんとにつくり変えてもう一度、もっと子どもたちにいろいろなことをやらないかん場につくり変えないといけないと思いますけど、そうなってない。

言いたいことは３つです。よく考えたら子ども青年といいますけども、少年という言葉は本当に使っているのは今まで研究の、心理学とか教育学とかそろっていいますけど、ほんとにそのときをどうするかということはですね、まだやはり、教育も様々なとこもつくってないと思うんですね。私はぜひ、少年期という10歳から17歳、こういう事件で少年法を変えてもっと厳罰にせんとという意見がありますが、私は声を大にして半面は正しく反面は反対といいたいんです。つまり、ヨーロッパの少年法など非常に厳しくし始めているんです。それはなぜかというと、中等教育ですね、中学校くらいから働くとか、いろいろ様々な子どもたちの場をいっぱい与えた上でちゃんと責任取りなさいといってるのに、日本はそういう場を与えない。ないして少年法という形で押し付けたらもっと陰湿なですね、様々な事件は逆に起こると思います。こういう点でゆくゆくはですね、私の少年法改正は賛成ですけれども、今のところはもっとそれよりか子どもたちが生き生き

と人間らしくですね、活動したり育つ場をまず与えてね。与えてるにも関わらず君達はそういういうことを悪いことをしている。その時にはやっぱきちんとですね、責任をとらせる少年法にすべきだと思うんです。そうすることも含めて私は10歳から17歳で選挙権、今日はあれですけども、もう本当に日本だけですよね。外国では18歳で選挙権になっているんですけれど、日本はご存知の通りでそういう点で本当に、青年期を文字通り18歳から始めさせる。その前の少年期をきちんとですね、つくるということを考えていく。もちろんそのためにはもう学校制度とか様々変えていかないといけないんですけれども。

あと時間は５分になりましたけれど、私はこういっているんですよ。今、10歳からですね、子どもたちと家族や地域も新しくですね、大人も一緒になってつくろうということができたらいいですね。20世紀のこういう物質的な消費生活が幸せだというこの社会をですね、子どもたちと転換できる。もう１つはマイホームが幸せであれば地域がなくてもまぁ生きていけるという、このあり方を変える非常に大きいですね、チャンスが来てる。だからぜひですね、今日は危機ばっかしじゃなくてですね、この危機は新しい少年期と、そして新しいですね、地域を中心とする人間の共存関係、家族がしっかりせえっていっても、はっきりいますけど家族は私の研究ではどんなに頑張っても４割くらいしかもう少年期の場はないといわざるを得ません。ま、今日は細かいことは言えないんですけれどもね。したがって、もうマスコミも今度の事件では、家族は先生は…ともう非難するんじゃなくて総合的に考えていかないかんなあというふうになっているのは、私も正しいと思うんですね。したがってそういう点で少年たちと新しい時代を、具体的な生活体験を作る中でつくっていこう。そのことによって子どもたちは本当に実感のあるですね、自分を認める自尊感情、つまり英語でself-esteem といいますけど､そういうものを設けることができるのです。資料に書いている後半のことですけれども、１つは具体的に子どもたちがですね、単に与えられた場をいろいろ活動するっていうのはいっぱいあります。じゃなくて、子どもたちが企画して、しかも子どもたちが、従来の地域や家庭での挑むことのできなかった新しい役割に挑ましていく。子どもは我々に比べたらはるかに情報とか持ってます。今情報が悪い情報が悪いというのではなく、その情報をですね、本当に、創造的な主体的な役割に結び付けていくんですね。学校も教える事をですね、まぁ６割くらいでいいんで、子どもたちがそういうことをやっていくことを支援する教育であってほしいですね。地域の仕組みを変えていくことが、私大事だと思うんですね。

３つ書いてあります。１つはやっぱり開放する、ストレスが非常にくる大人もそうですけれども、遊びや自然体験や文化体験などをもっと、作って、しかも大人が作るだけじゃなくて子どもたちもですね、それから自己価値体験と思っているんですけど、自分が本当に何かを作っている、自分が役割を引き受けているという体験をですね、家庭も作り返さないといけないと思うんですよね。部屋を与えてばらばら家族が多い中に、もう１回家族とは何かというのは、今のままでは親が自覚したってどうにもならんわけで、家族生活そのものから作り変える。そして、書いてあるんですけど、遊び、それから大人たちを交えた社会、人間関係を作っていく。そういうことが大事だと思います。それから時間がありませんし、西林さんをあとから言われると思うんですよ。そのためにはやっぱり子どもが育つ仕組み、システムを作り変えるほかはない、もうどうしようもない時代です。したがってそういう点では総合的にですね、子どもの私は居場所というか生きる場所つくりをどのように作っていくかです。あとはまた時間があれば補足させていただきたいんですけれども、あと30秒になりましたので、ちょっと抽象的で申し訳なかったんですけれども、まず、最初の問題提起を終わらせていただきたいと思います。

上野

はい、ありがとうございました。猪山先生はトップバッターということで、少し問題の枠組みといいましょうか、どういう問題があるんだろうかということについてお話いただいたわけなんですけど、先生のお話の中では新しい少年期の構想といいましょうか、そういう提案だったかと思います。1960年代以降、学校が肥大化していく、またそこの保護者も意図していくような社会ができあがってしまった。そこで逆にいいますと親や地域のもっていた教育機能というのが相対

的に低下していったという歴史だったんではないかというご指摘だったと思います。そこで、21世紀を目前とした社会の中で、学校も含めて地域・家庭の機能というものをどのように再構成していくことができるかという、そういう問題だったと思います。

次に西村さんからご提案いただきたいというふうに思いますけれども、猪山先生のお話の中で、関連して思ったことがあります。このバスジャック事件を起こした少年の母親の評価なんですが、地元ではいいお母さんだったそうです。地域の活動もいろいろおやりになっている大変いい人だったというわけです。そして事件を起こした少年も、とても育てやすかった少年だったんだろうと思います。進学校でも県内でもトップクラスの進学校を狙うことができた少年が、逆にいうと、いい親、いい父親、いい母親、そして育てやすい子どもがあったがゆえに何か見逃してしまった点があるのではないか。また、そういうことが報道されるにつけ、あんまりいいお父さん、お母さんにはなれないとか、うちの子はあんまりできる子ではないから逆に問題を起こしても当たり前じゃないかっていうふうに、受けとめられ方など変えられる必要があるわけですね。そういった少し中に踏み込んだ議論について今度は臨床心理士をしておられます西村先生からご提案いただきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

西村

西村と申します。私は、佐賀を拠点に、又長崎は佐世保で、実際に子どもの相談、心の相談というものをやっております。スクールカウンセラーという立場は、細かい事を言いますと、乳幼児検診発達系の相談で伺ったりとかする、どちらかというと動き回っている子どものカウンセラーと思います。というのは、もう一種のこれは持論なんですけども、カウンセラーというのは、個を対応していきます。個に対応していくんですけれども、それだけでは対応できなくなってきているのが本当に現実です。学校や家族と地域の中で、要するに一人のお子さんを見たときに、そのお子さんが帰っていく地域の中で学校の先生とかあるいは地域の方とどう関わったらいいかということまで踏み込んでいかないといけない現状があります。実際に、佐賀の事件がありましてから急激に相談の回数件数が増えております。それは必ず、あの〜うちの子もあれに近いのだけれども…というのが特に多い。実際に私が現場で相談を受けてますのは、もう実際に今首をしめられているんだけれども…とかですね、あるいは、あの〜包丁をもってるとかですね、もう本当に切羽詰った現場の中で、それを今度は学校とかあるいは専門機関とかにつないでは、どうやってつないでいくかとということをやってるわけですけれども、今日そういう現場の中でやっている立場として、子どもの姿をどんな風に見たらいいのか、あるいはそれを地域の中でどんな風に関わったらいいかということを少し、私なりに考えたことを、実践していることをお話できたらなと思います。先程、猪山先生のほうがおっしゃっていたけれども、子どもの姿っていうか、子どものとらえ方、人を見ていくときに、人間のその３歳あるいは10歳、思春期、そして40歳、と言うのが大きな節目であると私も思います。自分自身のこと振り返ってもそうだと思います。と言うのは、その節目節目のときに、今まで古いものをもう１回整理して捨てて、もう１回生き方というものを取り入れていく。それが思春期というのはいっぱいあるわけで。だから、非常にもう混沌としているわけですね。私が思春期の子どもさんたち、あるいは青年期の子どもさんたち、不登校も含めて、非行も含めてですけど、接してますと必ず、またあとで出ると思うんですけれど、乳幼児期の問題をきちんと我々が把握しておかないといけない。乳幼児期が問題だっていうわけじゃないんです。乳幼児期がどういうことが行われているかっていうのをもう１回把握しとかないと。思春期の子どもたちは、乳幼児期のことをもう１回出してるっていうふうに私はいつも思います。それをどう付き合っていくか。それはどういうことかというと今日は時間がないのでそんなに長く言えませんけれども、私はやっぱり、発達の未消化というのは必ず起きている。だから現場に小学校の先生が今いらっしゃると思うんですけど、この会場に。１年生を担当された先生がいつもおっしゃいますけど、５年前の１年生と今とは全然違うとおっしゃいます。それは中学生でもそうだと思います。ていうのは、小学生にあがってくるお子さんは、もう実際に排泄とか食事のお世話をしないと一学期はおれない状況が、学校現

場にはいくつもあっています。それくらい発達の未消化ってのが起こっています。それは私が見た感じでいうと、やはり、ここにかいてますけれども、心とか体とか安心してゆだねていくっていうような３歳くらいまでの体験っていうのが非常にされてないんじゃないかと。ということが１つあります。それは、母子関係もあるし、家族の関係でもあるかもしれません。けれど、そういうことが１つあるのと、それを体験して、次に４歳くらいからのしつけの問題が入ってくるんです。そこの中で父性とか母性が家族の中に入ってくるんですけど、その中で自己コントロールを学ぶわけですね。しちゃダメとか。それをですね、家族の中、家族の中でそれをそのプロセスと地域の中でのそれを考えた時に、昔はそういうことがあまりはっきりしてたんじゃないかなあ。というのは、３歳までのゆだねることを、昔だってたいへん、たいへんな時期に子育てをいっぱいされているんですけれども、それをゆだねることを地域の中でいっぱいされてた。地域で子育てをされてたことがいっぱいある。誰々ちゃんの子はこうだよっていうのが必ず地域の中で他のことがみんな把握できた。あと、例えば、今度は自己コントロールが家庭の中でできなくても地域の中で厳しいおじちゃんがいたりとか、優しいおばちゃんがいたりとかっていうのが地域の中にあった。だから昔は、そういう共同体があったわけですね。農耕民族でしたし。そういうものが地域の中でも家族の中でも家庭の中でも少しずつ崩れてきているんじゃないかなというのを少し思います。そういったときに、私たちは子どもたちがなにを言わんとしているかっていうと、ぼくたちのことを理解されてない。理解してよっていうことを言っているような気がします。私達は、皆さんもそうですけども、自分のことを何となく理解してくれてる人がいるっていうだけで随分ちがうわけです。自分達がかんしゃくを起こしたり、ヒステリックになったりしたりとか、いろんな人間関係トラブルは、自分のこと理解してくれる人がいるかどうかの、非常に大きな、その辺が出てくるんじゃないかなと思うんですね。例えば、聞き手の問題とかですね。それこそもう、お母さん方とかお父さん方と面接してますと、例えばですね、多分こういうことがあると思うんです。例えば学校でタバコをのんだ。喫煙者、あるいは万引きか。そしたら学校の先生が会ってくれないだろうかといわれると、僕はもうお答えよりも、まず家族の方にお会いしたいということで言いますと、あるいは警察から報告する場合もありますけど、そういう時に、お母さん方のおっしゃるのは「先生、もうタバコは許せるけど万引きはですね…」ていうのが非常に多いです。もうこれ現実です。「タバコはですね、何かと許せるんだけど万引きはね…」って実は、今度は万引きをしたお父さんたちに来てもらうと「お子さんになんとおっしゃいました？」と言うと「先生、万引きのもう、したんですよね？」って話したら「万引きするくらいだったら欲しいものがあったら言えっていっときました」。非常にそういう意味で、私からいうと父性の部分っていうんですかね、そういう厳しいの部分のところが非常に欠けてきてるっていうのがある。それとあと、思春期の子どもたちともすごくつっぱってる。先程打ち合わせの時に言ったんですけど、もう警察に世話になるわ、茶髪だわ、学校は昼から出でくるわ、教室から抜け出すわっていうような子どもたちと、昨年10月学校に行きますと出会いまして。「お手上げだから何とかしてくれ」って言われるんだけれども、こっちも何とかできないということで。そして少しずつ子どもたちとコミュニケーションとりたいということでお母さん方を通して遠まわしに近づいていく方法をとりまるから。５・６名ですけれども会えました。６名が１人１回あってますけれども。その子たちとカウンセリングをずっとやっていく中で子どもたちが言ったことは「目立ちたいんだ。僕たち目立ちたいんだ。目立つ場所がないんだ」で、私そういう子どもに「自分のいいところ書いて」というと「ない」って言います。「自分のいいところ何もない」で、「自分がダメなところを書いてごらん」と言うといっぱい書きます。怒られること、勉強がダメなとこ、それからあの、非行の子どもたちっていうのははつっぱっているようだけれども、非常に自己概念とかに関してとってもひくいんだなあということ。不登校とかそういうお子さんたちもとってもそうですけれども、子どもたちの中のそういうものがとっても潜んでいるなということを感じます。それで、その子どもたちがバンドをやっているということを聞きましたので。バンドを１曲今やってると。でも、みんなから「うるさいうるさい」近所の人から「うるさい」と

言われているということです。そのバンドで「学校で目立ちたい」ということで言うものですから「じゃ、バンドをどんな形でやっているのか」ということを話をしましたら、子どもたちが「お母さんたちに理解してほしい」ということを自分の親に。あるお母さんがとっても理解のあるお母さんがいらっしゃったもので、そのお母さんに来ていただきましたら「自分たちも何とか支えになりたい」とおっしゃったんですね。じゃあ部屋を開放してバンドの練習をさせます。今一生懸命やって15曲くらい覚えて、先々週ミニライブを公民館で行いました。私はその時に、この地域っていう猪山先生とか森山先生の間で少しお話をしたことがあったものですから、もう少し地域を活性化させたいなあというのがあって。じゃあ、公民館にお願いするにはどうしたらいいのか自分たちで考えてっていったら、その茶髪の兄ちゃんたちが公民館の館長さんのところに行ったりとか、近所のところに行って音がうるさいですけれども当日はよろしくお願いしますとか、ということを言ってまわるわけですよ。もう必死です。そして、あと、プログラム配り、そして、担任の先生が来るかなあとか言うから、担任に一言自分たちから言わせて、その間に僕はぜひ来て下さいと話をして、だから僕は全部裏方にまわって、当日私も行きました。そしたらまぁ、バンドっていってもどなっているようなうるさいかなと思ったんですけれども、でもそのドラムはいいよーとかですね、ノートに書いて渡したんですけど。たまたま看板をですね、みんなでかいたんです。その看板を見たあるお父さんが県の美術館に出そうかと。「えー」とか思ったんですけれども。で、また仕上げて出されました。でも予選落ちしたんです。ダメだと言ってました。けれどそんなふうに地域のお母さん、当日地域のお母さんとかみんな入れてスタッフ。私はこの子どもたちっていうのは、ひょっとしたらですね、不思議と茶髪がなくなってきたんです。今もう半年以上経っていますけど、茶髪がなくなった。相変わらず学校は遅れてきています。でも先生方は、その遅れることを常に問題にされてますけど、私は先生方に、遅れることうんぬんよりも、来た時にどう対応するかを考えましょうと言ったら、保健室にいったりとか私の相談室に来たりとか、あるいは教室に入ったりしているんですけれども。保健室で勉強したいと言ったから、「好きなのしていいよー」と言ったら、小学校４年のドリルを持ってきました。中学３年生、これが現実なんです。子どもたちの。それを今保健の先生といっしょにやっています。私はそういうことを支えるということを、あのー、要するに私がいう支えがないというのはそういうこと、そういうことが支えることじゃないかなあ。１人じゃ支えられないわけですね、人は。そうすると、それを分かってくれる人を何人か広げていくかっていうこと。そういうことが子どもたちは大事かなと感じます。思春期、ずっと私は発達の未消化っていいますけれども、その時に子どもたちが思春期になってきますと、必ず先程言いましたように、自分でギアチェンジをして行こうとする時、どうしても心の部分がゆれてると、思春期本当に揺れてます。揺れて揺れてる中で、乳幼児期の体験が、例えばとっても辛い体験があったりとか、認めてもらえなかったりとか、独占欲を体験できなかったお子さんたちはもう１回ですね、自分を固めるために、例えば内に向かうタイプと、要するに不登校であったりとか心身症的ですね、自分の体にこう向くタイプと、非行型に外に向くタイプがあるわけです。それによって自分をアピールしていく。それと、私たちが、あぁこの子達はいいなぁと思うのは、自分を消化していく。部活を一生懸命やって、勉強を一生懸命やっていくっていうのが自己消化ですね。要するに自分を高めていく。というのは一握りになっているんですけれども、ストレスとなった時に、やはり、外に向かっていく非行型に走る、あるいは内にこもっていく子どもたちの内面のそういう乳幼児期に体験できなかった事をもう１回どこかで、みんなが力を合わせてですね、体験させる。それがですね、子どもたちの大人になる時の私は必ず支えになるような気がします。それは、教育っていうのは速効性を求めますけれども、それでも子どもたちの心の変化に即効性は常にないわけですね。だからそういう意味で、より関係性を持続していくっていうのはとっても大事かなと思うんですよね。そういう背景の中に地球とか家族とかの変容とか、あるいは先程猪山先生がおっしゃいましたけれども、家族っていうのはもうやはり、私はいつのまにか下宿化されていると思いますね。食事を食べたり、非行の子に私は話をします。食事風景を必ず聞きますと、１人で食べてるっ

ていう子がとっても多いです。だから家族の下宿化というのは、お母さんがご飯を作ってらっしゃる家族もすくなくなってきているんですけれども。つくられるとそれをどれだけそれぞれが勝手に食べたいって部屋に行く。そういう下宿化傾向ががとってもあります。小学校に私、アンケートとりましたら、朝からご飯を食べてない子どもたちは17人いました。500名くらいいる学校の中に。だから非常にそういう家族が下宿化している、あるいは生活の時間がとっても乱れている。この間、乳幼児検診をしましたら、３歳のお母さんがヒステリックになるからどうしようもないというその子を聞いたら、夜は12時くらいまでスキンシップが大事だということで。12時くらいまでお子さんをあやし、遊んでる。寝るのが２時３時です。もうこれは現実に本当に小さな片田舎で起こっています。だからこんな風に非常に生活リズムが壊れてきている。それとあと、私はそういう中で関係性を回復するためには、地域とか家族が非常に孤独、孤立化しているからだと思います。ここで地域といわれているんですんですけども、また学校からも地域との連携といいますけれど、私は地域の中をずっとまわっていますと、子どもと老人しかいないんです。今、大人はみんな働きに出て行ってます。それか専業主婦です。非常に子育てが孤立化しています。どこにも行きようもない。だから、そういう中で、どんな風に関係性を回復していったらいいかということですね。そういう中でこどもたちが完全に守られているんだというような昔のいう、誰々ちゃんのことみんな知ってるよというような空間作りというのをどんなふうにしていったらいいだろうと思うんですね。そのためには私はやっぱり家族を支える地域とかっていう風に、中でそこに少し心理的社会的介入として関わりを持続するという持論があります。関わりを持続していく。相手を尊重しながら支援関係を作るっていうのが、例えば、精神保健とか医療の世界ではあるんですけれども、そういう関わりを持続するっていうことをしていかないといけないんじゃないかと思ってます。それは昔から、昔っていうか私も今47歳なんですけれども、私たちが小さい時には、心を使うとか心を動かすということがたくさんあったような気がするんですね。例えば、ドア１つ開けるにしても、とっても周りを気遣うとか、あるいは誰々ちゃんの今日は誕生日だからっていうとケーキなんかでも、今ケーキをしょっちゅう食べれる、欲しいとき食べれるわけですけれども、昔はその時に待たないと心動かしながら待たないとできなかったことがたくさんあったんだけれども、今そういうのがいっぱいすぐできるようになっている。だからせめてこの地域の中で気になる子どもがいたら、誰がどんなのその子に心を動かしてあげれるかっていう。そういうことがとても大事にくるんじゃないかなと感じがします。そこで、時間はありませんけど、私は子どもとか青年とか老人などが一緒に学びあうような場があるかどうか。何か非常に世代が分割しているんじゃないか。お年よりは何かどっかでゲートボールされてるし。何かそれぞれがそれぞれやっているんじゃないか。だからもう少しやれたらなって感じています。１つは私は開かれた学校って何やろか、学校の先生方、教育関係の方は非常にいらっしゃるんですけれども、私、具体的に開かれた学校っていつも言われるんですけれども、どんなところだろうって思うんですね。そういった時に、非常に教育がそういう中で崩れる時に、私は公民館でもいいんです。コミュニティーセンターでもいいんだけど、学校を核にして子どもを育てていけないだろうか。例えば、実際にどういうことかというと、行政とかあるいは地域の中で何か行事をやったりすること、今このスケジュールが許されています。地域で何かやるときにスイミングスクールがあるから、今日ピアノの発表会だからといってこのスケジュールを優先するために非常に集団に目を向けるということができなくなってきています。ところが学校の現場の中では私は学校をもっと活用したらいいと思います。実際にこの間小学３年生が社会科の時間に自分の町を知ろうという探検する時間がありました。あれを僕はもっと活用したらいいのになあとふと思ったのは、あれに親御さんたちも行かないわけですよ。行く親御さんもいるけど。そうすると、私実際に子どもたち、ちょうど現場にいた時にそういう体験がありましたのでいっしょにまわってみると、神社の階段が何段あるとかですね、知らないわけですよ。どっか店に、ここにこんな店があってここがとっても危険だとかですね。そういうことを親御さんと学校現場の人とかで子どもたちに直に体験できるわけですね。教科を使って。そうすると非常にそ

ういう風にして開かれた学校というのは、実にそんなふうに、もう少しこう姿勢を変えるべきではないかなということをこの時ふと思いました。それで、この地域の中でやっぱり老人とか子どもたちとかしかいない。そしたら、学校にもっと、例えば具体的に言いますと、学校の図書館をもっと開放していいわけです。地域の人たちに。地域の中に子育てでおんぶしたお母さんが本を読みにきたっていいわけですよ。お年寄りの人がきてもいいわけですよ。他、授業参観がある時に、その地域の人が見にきたっていいわけですよ。地域の子どもたちの授業をですね。それくらいのもう何か変えないといけないときに来てるのかなということをすごく思います。それと、私はこういう仕事をしてますと、どうしても縦割り社会をすごく感じます。というのは、子育て支援にしても、保育園もやってる、幼稚園もやってるんですね。じゃあそのつながりがあるかどうかといってもないんですね。社会教育課が子どもの問題についてこういう講演会をしますっていくと学校関係とか保育関係とか、あるいは保健関係とかも全部関係するのに来ない。連絡がいかなかったり。民生委員だってそうですね。全部偏って動いている。保守的に向かって。地域の、例えば公民館で何かやるときに、地域のどこかに行ったらいい。そういう何か縦割りの部分を少し繋げられないだろうか。そのためには、そういうやっぱりコーディネーター的なものが必要なんですけども、それでも何かそういうことをどんなふうに育てていくかと言う事もこれからの課題かなという感じがします。時間はありませんけど、私たちが子どもたちと関わっていく時に、もう個人じゃどうしようもないってこと。私たちが周りの人とどんなふうに手を組むかということですね。だから、カウンセラーが医療の世界や教育の世界の屈指の人とどのように手を組むかということですね。一緒にやっていけるかとか、もう１回見直すべき時にきているかなということを思います。ちょっと早口になりましたけれども、日頃思っていることをちょっとお話しました。以上です。

上野

はい、ありがとうございました。西村さんのご報告自体は本当に意義深いものですね。お仕事はスクールカウンセラーのお仕事をされているわけですけれども、学校のカウンセリングだけでは対応できない、それを地域によって対応していこうという立場でお仕事されている、とういうことなんですね。それで今お話にもありましたように、子どもの基本的な生活習慣が崩れてきている。そしてそれはおそらく子どもの基本的生活習慣が崩れているのではなくて、親の基本的習慣が崩れているんだろう。そのあおりをやっぱり子どもが直接ダメージを受けているのではないだろうか。そこで、それが思春期になっていくと、こうやってあちこちとぶつかりながら、自分を作っている。まぁある種、確立していこうとする時にもう１回乳児期からの発達の未消化の部分を再度作っていこうとする時に問題として出てきているのではないだろうか。それを支えていくための姿勢作りといいましょうか。そういうことが大切ではないかというお話だったと思います。それでは今のような問題につきまして今度は１人の母親の立場として、ご発言いただきたいと思います。それでは、窪田さんお願い致します。

窪田

こんにちは、窪田です。私は1956年生まれ44歳、高校２年生３年生の子どものいる母親です。まさに今、17歳問題であげている母親の１人として、等身大の自分をだして、１つ発言させていただきたいと思います。まず、バスジャック事件が起こった日の我が家の風景。まず、母親が犯人が高校生だと聞いて「え⁉もしや…」って不安が頭をかすめました。「まさかね」とおもいながら「でも」。こういう事件っていうのは、もう最近では他人事ではすまされまい恐さっていうのが潜んでいると思うんです。もう随分前から、うちの子に限って、というふうなことはないと言われてきました。け

れどもいざ、自分の子どもが高校生になった今、やっぱりそうなんだなあっていうふうに実感しています。そんな親の心配をよそに、息子は２人ともゴールデンウィークの楽しい一日を友達と過ごしてルンルン気分で帰ってきました。「こんな事件があったんだよ」っていうふうに言うと、子どもはそれを聞くなり一言「だから頭のいい奴は危ないんだ」自分を正当化しようとするその発言に「ちょっと、それ変よ」「ちょっと違わない？」って言ったんですけれども、よく考えると子どもたちの世界ではそれが実感なんじゃないかなっていうふうな気がしました。勉強がまじめにできる＝いい子＝危ない、そういう感覚的な数式っていうのは、成り立たないんじゃないかな思うんですけれども、机の上で勉強ばっかりしてて人間として自立するために必要な体験をしてこなかった子どもっていうのは、どこかバランスが崩れているんじゃないかなあというふうな感じがしました。私は18歳の子どもがおりますので、子育て歴18年なんですけれども、実際、私の子育ては孤独の子育てから始まりました。今、こういうふうに甘木市子どもの文化ネットワークの代表と言う事でありますけれども、最初、スタートは本当に孤独から始めリました。その辺のお話をちょっとさせていただきたいと思います。東京生まれの東京育ちということで24歳の時にこちらの方にやって参りました。まず言葉が通じない。50％ぐらい方言が分からないんです。ということはもう話さないんです。外に行って、友達ができるできないの問題ではないんです。電話がかかってくるだけで恐いんです。「すみません、もう１度言って下さい」というのも３回が限度ですね。そういうことで、子育てをしていくと、やはりもう何を聞くにも夫と夫の両親しかいないわけです。そういうふうな中で、夜、夫と夫の両親が帰ってくるのを待ちわびる日が続きました。子どもが病気になるのがうれしかった。なぜかというと小児科にいけるからなんです。小児科に行くといろんなお母さんと話ができますよね。そのくらい乳幼児を持った私にとって行く場がなかったんです。そういうふうな中で、一番入ってくる情報といえば、偏差値教育のあおりを受けた私たち世代に一番敏感に入ってくるのは、３歳では遅すぎる、もう遅すぎる、というふうなセリフなんですね。「は～」と思って、いいお子さんに育てないとこの子心配だな、という思いがどんどんどんどんかかってくるわけです。そういうふうな情報だけでいくと、とんでもない危ない事になったのではないかと思うんですけれども、実際にそういうふうな情報しか入ってこなかった。だから、就園児前の子どもさんを持ったお母さんのケアというのは本当に必要なんじゃないかなぁというふうに自分の体験から思います。そうなると非常に、ややこしいんじゃないかなあというふうに思うんですけれども、私は子育てのことを考えても、やっぱりこのことは３歳までにある程度のことが、基本的なことができてくるのかなぁというふうに思うんです。専門家がよく３歳までにっていうふうにいいますよね。でも、その時は何が３歳までが大事なのか分からなかったんです。３歳までが大事よ大事よ大事よってって言われる。じゃあ、どこが大事なのか。そこで、どういうことをしておかないと思春期になって大人になってどういう影響があるのかというところまで誰も教えてくれなかったんですね。だんだんだんだん子どもが成長していくにしたがって「あー、こういうことだったのね。あーもう手遅れかな」というふうなところで現在があります。例えば、子どもがすごく手伝いを「したいしたい。お母さん手伝っていい？」っていうふうなときがあります。でもそういう時って忙しくって「ちょっと待ってね〇〇ちゃん、ちょっと待ってね。お母さんがするからね。少し遊んでなさい」っていうふうに言う。そのことが何度も何度も繰り返されると、子どもはもうしなくなるわけですね。で、いざお手伝いを本当は大事だったんだと思って、小学校になって「お手伝いしてちょうだい」と言うと「いやーよ」と言う。そこですごい何倍ものエネルギーが必要になるわけですよね。そのエネルギーが必要になるなら、親がやってしまったほうが楽だっていうふうなところでどんどんどんどんそういうふうな体験が欠如したまま子どもが成長していくんだっていうことに今頃になって気づいたわけです。そういうふうなことってのは、いっぱいいろんな家庭の中で繰り広げられているんじゃないかというふうに思います。お母さん方もそうじゃありませんか？そういうふうな本当はすごく大事なことが先行ってどうなるかっていうことまでもっと教えてほしかったな。そういうふうに教えてくれる場っていうのはなかったんですよね。私達はそういうふうな教える

場、学ぶ場、お母さん達が本当に子どもの成長にとって、子どもの自立にとってすごく大事なこと、こういうことなんですよっていうふうなことを教えてくれる場っていうのを作っていかなくちゃいけないんじゃないかなというふうに思います。私は、甘木市子どもの文化ネットワークという子どもの文化創造をしょってる団体を6年前に立ち上げました。その中でいろんな活動をしてるんですけれども、子どもたちは本当に大事に思っている。本当に体験しなくてはいけないことをさせるためにはどういうふうにしたらいいかということを一生懸命学んでいます。よく例に挙げるのが、体験ってすごく大事だからということで、子ども会なんかでキャンプに行きます。その時の話をよく出すんですけれども、キャンプに、まず自然体験が大事だと。ただ自然を体験させる。子どもたちを親と一緒に連れて行くわけですよね。そうすると、じゃあ自然体験をその場に連れて行けば何かできるかというと、そうではなくて、その…、例えばカレーを作りましょう。カレーの材料をもう親が用意しときますね。それでいってるんですね。じゃあ、子どもたちみんなで作りましょうといって、ちょっと手伝わせて、それでみんなで食べて「あーおいしかった」と。で、それで体験できてるのかな。本当に体験できてるのかな。ていうふうなことをもう少し考えていかなくちゃいけないんじゃないかということを話し合ってます。子どもっていうのは、大人がやってみせたことを自分でもう1度繰り返してやってみることによって、改めて自分の力になっていく。そういうふうなことを繰り返していかないと、本当に子どもの力にはなっていかないんじゃないかと思うんです。まず、カレーが食べたいのか。キャンプでカレーが食べたいのか。キャンプ＝カレーというのは、何か大人の発想ですよね。カレーが食べたいということであれば、買い物に行くところから親がしてしまうのではなくて、子どもが自分で買いに行く。予算を考えて買いに行く。それで上の子が下の子に教えて「こういうふうにして切るんだよ」とかってふうなことをして。それでまずくてもいい。甘いカレーでも辛いカレーでもいい。出来上がったものをみんなで食べる。そういうふうなことで「あー、もうちょっとこうだったらよかったね」「こんなんだったらよかったね」ていうふうなことをする子どもたちは、本当にした、本当に体験をしたっていうことになるんじゃないかなっていうふうに思います。それこそ、活動はいろいろ繰り返していく中で子どもたちは成長していく。そういうふうなことを本当は、もっと昔はいろんな所でできたりとか。でも、家庭の中でもできたはずなんですよ。でも、もうできなくなってしまっている。それならやっぱり地域で支えていかなくちゃいけないんじゃないかなあというふうに思います。ちょっと話が変わりますけれども、家庭の中の子どもの仕事の役割についてちょっと話したいと思います。昔の子どもを言葉で語る時に、子どもも家族の一員として仕事を割り当てられていたっていうふうによく聞きます。このことが年配者の過去主義的な「昔はこげんやったー」みたいなことをよくおじいちゃんおばあちゃん言われますけれども、本当はすごくそういうことに対してすぐ、「えー、また昔のいいとこばっかり言ってー」みたいなところがありますけれども、本当はすごく大事なことで、自分がこの仕事をすることによって家族の役に立っている。あるいは、この仕事をしなければ家族が困るんだっていうふうなことを子どもが感じることによって、子どもにとって、その自分の存在感っていうのがすごく認められている。自分も認めて、自分の価値を認めていくことになるんじゃないかというふうに思います。その仕事をしたことによって、人の役に立つ喜びとか、この仕事をやり遂げた、やり遂げることも達成感っていうんですか。そういうふうなことがすごく子どもの体験にとって、子どもにとって大事なことなんじゃないかというふうに思います。まだちょっと時間があります。ある小学校の雨の日の話をしたいと思います。小学校でよく集団登校というのがありますよね。集団登校で並んでいる時に雨が降ってきたんだそうです。突然の雨で傘がない。そしたら、田舎ですよね。田舎なのにバーっと車が並んだそうなんですよ。車がきたかと思ったら、5・6年生のお兄ちゃんお姉ちゃんのお父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんがやってきて、「さあ〇〇ちゃん、帰るよ」と言って引き連れて帰っていきました。何人も、子ども何人もですね。そうなると、小学生低学年の子はどうしたらいいのか困ってしまうわけですよね。そのことについて学校側が今、問題提起をしているらしんです。すごく針のむしろであると。ちょっとおかしいと

思いませんか。なぜ、うちの子だけ傘持ってこなかったから乗せて帰ってる。よかったのかって。何で親が考えなかったのか、ですよね。そういうふうな人に役に立ったことを、体験を奪ってしまう。奪ってしまったことについて親は何も思わない。あるいは、その子どもが犬を連れて帰らなくちゃいけないから、傘だけちょうだいっていうふうに何で言えなかったのか。そのことも、すごく問題なんだなあっていうふうに思いました。雨の日に傘を持っていく。昔のお父さんお母さんは傘を持っていってあげたと思うんですよ。雨が降ったら。乗せては帰ってこなかった。まぁもちろん車がなかったから乗せてかえらなかった。雨が降って傘を持っていくことが大事、いいこと。「あー心配してくれたんだな」っていうふうなことですごく子どもは嬉しいけれども、乗せて帰ってしまったら、雨の日に歩いて帰る楽しみを子どもから奪ってしまうことになる。あるいは、雨の中をたいへんな思いをして帰る大変さ、耐える力を奪ってしまうことに。あるいは、濡れて帰ったら「はー、濡れて帰って辛かったから、今度雨降りそうなときは傘を持っていこうな」っていうふうに思う気持ちも奪ってしまうわけですね。そういうふうに大人は何気なく「あー、雨が降ったから乗せて帰ろう」っていうふうにしてしまったことがもう、子どものいろいろな体験を奪ってしまう。そういうことを雨の日1つにとっても、そういうふうなこといっぱいあると思うんです。ですから、そういうふうなことを大人は子どもに対してする時に、本当にそれが子どものためにになっているか、子どもの豊かな体験を奪うことになっていないだろうかっていうふうなことを、いつも問い直していかなくちゃいけないんじゃないかなというふうに思います。そういうことっていうのはやっぱり家族、特に一番近い母親がどういうふうに考えるのか、どういうところに価値観をもっていくのかっていうのがすごく大事なことなんじゃないかなというふうに思いました。価値観といえばもう１つ、子どもの仕事とかお手伝い、お稽古事、塾っていうどちらを選ぶかっていうふうな価値観がすごく大事なんじゃないか。そっちを選ぶかっていうのが母親にとってすごくいろいろ考えることだと思うんですね。お手伝いをさせたい、お手伝い大事よ。でもこの時間英語の塾もあるもんね。もちろん英語の塾、英語には限らないんですけど、お稽古事があるもんね。お稽古事が大事だけれども、でもお手伝いも大事。どっちをとるかっていったらやっぱり…。（小声で会場に）どっちとります？塾とりません？塾とりますよねー。心配やもん。何が心配かって、子どもが成長していくのに、やっぱり知的能力の方が大事だなってのがあるんですよ。そこで、どうしてもそっちをとってしまう。でもやっぱ、本当に子どもに真の豊かさ、子どもが成長していくときに本当はどっちが大事なのかなあっていうようなことをもう１度考える時期が来てるんじゃないかなあというふうに思いました。それは、私達１人１人が考えるのももちろんなんですけれども、社会全体で子どもの真の豊かさがなにかっていうことをもう１度考えてみて、みんなでいろいろなことを議論して育児していくのではないかなという風に思います。

上野

はい、ありがとうございました。窪田さんからはご自身の子育ての経験をもとにしながら、いくつかの問題を指摘していただいたと思います。三歳児神話という３歳ではもう遅いというふうにいわれながら、どこで家に子どもがいることを業者はかぎつけたんだろうかと思うような、経験をされたお母さん方覆いと思いますけどね。それで、「もう遅いんですよ」というふうにいわれながら「あそこのお宅でも買われましたと言って30万40万のお金持っておられる方をうらやましいと思いますけれども、高額な教材を買わされてそのままになってしまったというご家庭も少なくないかと言われました。ただ窪田さんご自身まだお若いと思うんですけど、今のもっと若いお母さん方のお話を伺っていると、ちょっと様子が変化しているかなと。窪田さんと私がだいたい同年代なんですけど、私どもの三歳児神話なんていったときには、子どもをどうやって立身出世させるか、そのことが子どもの為になるというふうに思って、早期教育がきれいごとを言ってるんじゃないかというですね。ところが、今私どもよりもっと若いお母さん方に聞きますと「そんなことは考えてない」と。子どもを公文にやっている天歳にしようなんて思っておられる方はほとんどおられなくて、そうやって子どもが落ちこぼれないかというふうに、防衛的な感じで子どもに先に先にというふうに早期教育を

与えていってしまっている。もうそこそこでいいんだけれども、それをしなければ絶対しなければ落ちこぼれてしまうじゃないかと不安が一層、今のお母さん方の中にはあるんではないかと言われていました。そのことが学習塾、そう、お手伝いの話をですね…窪田さんの話で２人ほど聞かれましたけれども、逆にいうとお手伝いはもう、子どもをあてにしないっていうこと。親のほうがあてにしないからもう、では学習塾に行かなきゃ、お金を払っているからっていうふうな選択肢になるというふうに思います。このように子どもにお手伝いさせたりするんだけれども、子どもにとって何が必要とされているという感覚が子どもに欠落してしまう。また先程通学班の話っていうのは、年長の子どもが引っ張っていくわけですけれども、その時に傘持っていなくて、そこのご家族が迎えに来て、そのリーダーとなる子どもだけ連れて帰って、他の子どもはばらして帰ってしまった、というお話ですよね。そのことが他の子どもと我が子との環境を分断してしまう。そういうところに親は思いがいたってない。子どもの方もそういう感覚を持っていないということだと思いますね。では、ダメだっていう意味でいろんな体験をさせるんだけれども、それ自体があてがっている体験になったり、また、体験のお仕着せのところでとどまっているんじゃないかという問題提起というふうに聞かせていただきました。それでは、シンポジストの最後になりましたけれども、森山先生の方からお願いいたします。

森山

福岡県立大学の森山です。私から言いたいことはいっぱいあるんです。パネラーの方が何人も言われましたけれども、昔は出来たけれども、今は出来ないということがたくさんあると思います。私は、昔というのを、産業化した消費情報化社会より前といっています。だから、消費情報化社会は生活がやっぱり変わらないといけないとのではないか。真の豊かさという話が窪田さんから出ましたが、私は、今からの豊かさは、心の豊かさでなく、物の豊かさでもない、関係の豊かさではないかと思っています。つまり、産業化した消費情報化社会からどのように変われば良いのかというと、自然とゆったりした関係、あるいは、非常に厳しい自然との関係をつくっていく。私は、烏骨鶏を20羽ほど飼っておりまして、鶏を飼いますと、ひよこの時ひなが死んだり、親鶏も死んだりします。こういう関係、人間と人間も、つらいけれども、楽じゃないけれども楽しい関係、関係の豊かさが私は、産業化社会を超えた、脱産業化社会の子どもの行く末でないかというふうに考えております。さて、５月３日、私は県立の英彦山青年の家で、県内高校生の300人ぐらいボランティア講座で提案させていただきまして、後、お茶のパーティで大変楽しく過ごしていました。今の高校生はそれこそ、危険危険というだけでなく、悩みながらも、いろんなボランティア活動や文化クラブの活動をしている人もいるわけですね。まあ、受験内申書のためのボランティアのよしあしというのはありますけれども。とにかく高校生たちとの非常にあったかい関係持っていました。その時テレビで知り、11時からずっと見ました。

私はこの福岡で18歳の時からいわゆるセツルメント活動の中で、子ども会活動など、ずっとやってきました。54歳になっても、「初心忘れられない」と思っています。そんな中で今の子どもたちの問題は、もっとも心を痛め、胸を痛めます。

私、今日はそういったことをやってきた体験でいろんな子どもたちにも会いましたし、もちろん青年、若者、少年にも出会いました。そんな中で、いくつか提案をしていきたいと思います。

まず１つは、皆さんあるいは私も、さっき言ったような不安とか、心配、今の十七歳は危険だとかいろんな形で言われ、不安を持っています。しかし、1998(平成10）年度の犯罪白書を持ってきてまいりました。実はインターネットホームページに載ってるわけですね。これによりますと、結局、殺人の発生率というのは、年間比率どうなっているのか。94年から95年、96年とデータで発生率と検挙率を国際比較調査している。アメリカは9.0％、検挙率は64.4％、これ1994年です。次に多いのはこの年はイギリスで、4.7％、72.6％の検挙率。日本は1.1％で、検挙率はなんと96.1％。それから、96年にしましても、アメリカは7.45で検挙率は66.9、次はドイツが増えておりまして、4.35、92.1、で、日本は1.0で98.5、我が日本の子どもたちはかなりいいわけです。まだいいわけです。で、それから人口

比率の検挙人員ですね、犯罪の検挙人員について、あるいは殺人の少年の検挙人口なんかの推移なんかは、ドイツがやっぱり最も多くなって、次にアメリカ、これは比率ですね。でも、日本、韓国というのは、一番下のほうなんです。で、殺人少年検挙も、アメリカ、ドイツ、イギリスで増えてきまして、順番としては、アメリカ、ドイツ、イギリス、で、フランス、日本、韓国ということなんです。

私はそういう点では、今、ひとつ皆さん方に私の意見として申し上げたいのは、マスコミ…今日はマスコミの方もこられているかもしれずまちんと科学的に見て書いている方も多いと思いますが、あまりにも、私たち自身が自信を失うようなセンセーショナルな報道がされている。私たちの子育てというものは良い面もたくさんあるんだ、それをもっとかんがえるべきことじゃないかと思います。

それから、もうひとつは、やはり、産業化した消費情報化社会の中で、つまり、近代社会が悪いことのようにいっぱい言われてきているんだと思うんです。それを、私たち自身の生き方そのものを変えていくことです。つまり、私たちから変わる。つまり、教師から変わる、親からも変わる。でも、「自信を持ちながら変わる」という方向でいったらいいのではないかと思っております。例えば、５年ぶりに日本に帰ってきて２週間ほど日本にいたのが、また、イギリスに帰った友人がいます。…それが４日ぐらい前です。彼女はお土産をもらって、空港の方でも包装紙をいっぱい捨てたんだけれども、イギリスの家に帰ったらいっぱいまた捨てるほど包装紙がいっぱいあるというのです。つまり、包装紙・ごみも少なくすることも含めてです。皆さんの中には、消費者教育関係をやってらっしゃる方もいらっしゃると思いますけれども、そういう私たちの生活自体が変わる必要があります。芹沢俊介氏、本田和子氏、私は今、子ども論ではこのあたりが一番すばらしいと思っているんですが、思春期というのは、別の言葉で言えば、「作られた自分から主体的に自分を創っていきはじめる時」そういった時期なんですね。だから、非常に心と体がずれるわけです。たとえば、私自身でも高校２年生の頃、ノイローゼに近い状態になり、この資料集にも載せておりますけれども、「いわゆる透明な存在としての云々」とか、「この世のすべての生命が、生命体が僕の？？すべてが秩序を崩壊させる」というようなことをこのころの日記に書いています。ただこの少年Ａが不幸なのは、こういう気持ちと体がコントロールできなくなって、殺人という形ではじけてしまったことです。

私なんかは、人を殺しても何も感じない、死んでも何も感じないという心と体のずれを、文章を読むとか、文学を読むとか、あるいはそれこそ居場所がある、本当に悩みとかきついことが言える、友人関係の中で 救われてきたと思うわけです。

ところが、今の少年には、そういった場所、あるいは、そういう関係が切れているのではないかということです。時間が余りありませんので、あんまりこの辺いえませんけれども、とにかく、子ども自体は産業化社会の中で、複合発達障害を起こしている。これは有吉佐和子さんが公害のことで単なる混合反応ではなくて、もう、化合といいますか、いろんな反応をしてしまって社会的な形で、生活慣習、しきたりになってしまっている発達障害です。これが原因なのに家族がいいとかわるいとか、先生が悪いとか、という攻撃がいっぱい出るわけですね。先生が悪いとか、それだけじゃない、これはさっき猪山先生が言われたし、今度文部省もですね、学校だけが悪いんじゃなし、子どもが悪いんじゃなし、みんなでいろんなことを考えようという路線に代わってきているんです。

私の幼稚園長時代の話で、子どもが、二人三脚をできなかったんです。運動会の卒園生の競技です。そういうことで私感じました。

それからもう、少子化の中で、幼稚園のお迎えバスに９時から９時半ぐらいに乗っている。９時半ぐらいにまだバスに乗っている幼稚園はもうすぐつぶれるわけですね。なぜかといえば、それしか子どもが集まらないわけです。しかし私、乗っている子どもは、そのとき、護送車、囚人の護送車ってイメージを持ちました。結局、往復１時間半、１時間から２時間かけてですね、幼稚園で４時間いるわけです。そうしたらもう、体育のときにしろ、いろんな必要がある時に、立ち続けておくことができなくなる。そういった、生活慣習、システムですね。システムとはどういうことが具体的にいいましょう。たとえば、高速道路で夏、車に乗っていると、虫を殺したらいけないと思いながらも、100

キロを出すと、虫はどんどんぶつかって死ぬわけです。時には雀が死ぬこともあります。じゃあ、60キロで走ろうとすると、後ろから車がつかえ、急ぐようにいわれるわけです。こういうシステム自体をやはり変えていく方法がないだろうかということです。

私、中国の子どもたちと日本の子どもとの調査をやっていく中で大変な違いに気づきました。これちょっとレジュメに書いてますからあんまり詳しく言いませんけれども、4029名の調査をしました。現在、それこそ、ものの豊かさはない、今から豊かになろうとしているつまり、産業化社会になろうとしている中国のほうが実は、セルフエティーム（Self-esteem）という自尊感情、自身は自分の力で生きていける、他人との関係で生きていける、お母さん・お父さんからは信頼されている。教師も、私のことをちゃんと見てくれる、こういうセルフエスティームが高いということが大事じゃないかなあと思います。私どもは、生活体験学校とか、生活体験学会に…私なりに関わったのは、ここら辺りがひとつの根本、つまり、産業化社会に、本当にポスト産業化社会にということを切り開いていくような方向があるんじゃないかということです。

具体的には４点ぐらいここに書いています。一つは、今、ほめられるという体験がないということです。…やはり、人の子ども、自分の子どもでもほめて・しかる運動というのは大事なことだと思います。

私の大学は田川市にありまして、そこでホメシカ運動（７ホメて、３シカる運動）をやろうといっている。この前も、アメリカに１年間子どもと一緒に留学していた比較教育学の先生が言っていました。子どもたちが、公園で遊んで野球の練習を、監督がやっているのを見ていた。自分の子どももいったりしていた。そうしたら、その監督はよくほめるのだそうです。ボールをグラブで受け止める時、失敗しておこるより受け止めた時ほめるのです。こういう形ですごくほめた試合をやっていた。ところが、日本に帰ってチャンピオンシップの少年野球なんかで、監督なんかを見ていると、「なんだなんだ」ということで怒って悪いところを探してやっている指導の方法中心です。私たち大人自身、「豚もおだてりゃ木に登る」ことわざもあります。まあ、ほめられる体験というか、ほめられる安心した関係が非常になくなってきている。

これは、個族ということ。こ、とは、個人の個、これは、1998年に日経新聞が元旦号に「個族の登場」ということをトップで出しました。個別の個ということが、個じゃなくて、孤独の孤になってしまった。そして、自信と自尊感情を奪ってしまった。皆さんもそうでしょう？例えば今日、帰りがけに、お酒を飲んで、それでも家で、お父さん（お母さん）が寝ないで待ってて、「仕事大変だったでしょう」といわれるとうれしいでしょう。

それからもうひとつはですね、公と私ということで、今、自分（私）中心、ということが多くなっている。だから、公というものを大事にせんにゃいかん。公的なもの大事にせんといかん、ということで、今、アンビシャス運動なんかが福岡県ではきている。そして、青少年がですね、個性を、といって、一人一芸を！といってる。これは大変いいことだと思う。ところが、よこからでなく公が上から指導して、管理的な形とか、管理強化になってしまう形でアンビシャス運動が展開したら、非常にいけないんじゃないかと思います。そういう中で、本当に個人が開いてつながっていく、まあ、短い時間じゃ言えませんけれども、私は、納豆形とか、おにぎり方社会といってる。社会でのつながり方が必要です。納豆というのは、個人という一つ一つのちがった形や性質の粒がくっつくわけです。ねばっとくっついている。おにぎりというのもくっつくわけです。お餅とおにぎりは違うんですね。お餅はぎゅーっと個がなくなってしまっている。でも、私は、納豆型とか、おにぎり型社会として、人の道を教える教育が必要なんです。その倫理教育の中身はですね、それこそ、修身とかいうことじゃなくて、規範教育ということが出てこないといけない。倫理というのか、人の道というのが出てこないといけないんじゃないかと思います。

最後に言いたいのは、私は、校区、小学校区ごとに校区コミュニティみたいな形でできないだろうかということです。実は、小学校区でです。今は、中学生になったらメディアの中にどんどん広がっている。中学生のネットワークは、インターネットで、それこそ世界的に広がっている。これは、テーマコミュニティとも言える、限定的コミュニティとも言える。人間というのは、こういったふうに世界とつながっていいんで

す。しかし、ゆったりする場所はどこかで必要なんです。だから私は、さっき乳幼児とか、３歳児ということが大事だし。３歳児なり、小学生、中学生なりにもうひとつ、生活空間の居住コミュニティを提案しているのです。小学校区というのは、居住コミュニティでありますし、その中で、個別の課題、さっき西村さんなんかの言葉で言えば、例えば、精神障害を持った人たちなんかが、そんな人たちに対するボランティア関係のグループが出来てくるとかが必要です。障害者関係の人たちにとっては障害児関係の人が出てくる。高齢者には、高齢者、こういうことが小学校が核になってですね、テーマコミュニティといいますか、生活課題のコミュニティなんかが、どんどん出てくるのです。

それから、遊ぶ場所ですね。冒険遊びができるところ、直接的な生活体験というのが、どんどんできる場所が必要です。

例えば、鶏をですね、私、鶏を飼っているからまた言うんですが、鶏を絞める教育について話をしましょう。私は福岡市内博多区の席田校区にいるんです、席田小学校で飼っていた鶏を３羽我が家で飼ってるんですけれども、先生方と一緒に鶏を絞めましょうと言うと、「そんな命を大事にしない教育はしませんよ」、今、のびのびになってしてない。本当に命を大事にするのはですね、鶏が死ぬ苦しみを見せる、そしてそういうものを食べていかざるを得ない、命をいただきますということでね。こうした「いのちの教育」は、新聞などでも賛成反対で議論されています。私は10歳以上位からは必要だと考えています。いのちを頂いて生きているというね、そこで、命を大事にするってことじゃないでしょうか。小学生にしろ、中学生も、高校生も、おじいちゃん・おばあちゃんが死ぬ場所というのはもうわからない。触れることもほとんどできない。いわゆる、「近代の逆説」と言われているんだけれども、命を大事に大事にっていいながら、命を大事にしない、それから、安全に安全にと言うから結局、上手なけんかができない子どもたちができてしまう。そういった冒険が、できるような広場、居住空間をひとつのコミュニティとして、小学校区単位で、学校の中や校区につくることが、開かれた学校であると思います。こういう実践と言うのが必要じゃないでしょうか。そして、その中に、プレイリーダー、つまり、遊びの指導者ですね、それから、ネットワークのコーディネーター、こういう人が必要じゃないかと考えているわけです。そして、私が今、それを田川市の全川小学校区なんかを、校区事業、同和教育の校区授業ということでやろうとしているわけですね。私なんか、田川地区のほうで、ネットワーキング研究会とか、あるいは、岡垣町なんかでも、そういったことを入れて、子どもが思いっきり、親とか、管理の目から離れた自分の空間を自分たちの空間を、自己決定・自己選択できるような場所を作りたいと思っているわけです。

以上、時間が来ましたので、これで終わります。どうもありがとうございました。

上野

ありがとうございました。ポスト産業化社会の話から、ご提言をいただきました。内容はこういうご提言だったかと思います。この消費情報化社会が進展すると言うことのよって、日本は先進消費国の中で、非常に厳しい立場にたたされている。そして、競争社会というものが生み出されている。このひとつの問題として、犯罪、少年犯罪の増加が出てくると言う話だったですね。まあ、他の国に比べればその点ではまだ犯罪率が低いんではないかということだったですけれども。そういった状況からどう脱却していくのかと言う風に考えてきたときに、私たち自身のライフスタイルと言うものがこの、消費情報化社会に流されていくのではなくて、それに糾う新しいライフスタイルを創造していく必要があるのではないかと。そのことから校区においての子どもたちの居場所というものを作っていく。それをどう作っていくことができるのか、と言うご提言だったかと思います。それでは、今、４人の方の先

生方のご提言をいただいた上でですね、コメンテーターの横山先生から、４人の先生方の話を聞いてのコメントをいただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

横山

はい、感想なんですけれども、皆さん方感じられたことと私も同じかと思うんですけれども、いくつか感じたことを話させていただきます。私は、発達心理学、児童発達関係が専門なんですけれども、まず、何人かの先生おっしゃられました、少年の時期と言うのは、一部では、少年たちが言っていたことを捉えてですね、特別な感じで報道されている動きがあるんです。しかし、振り返ってみると、これ、ルソーが言ってますよね、自分たちが子ども時代を過ごしてきているのに、子どもってどういうものか忘れてしまっている、と。で、皆いい状態でずっと少年期過ごしてきたわけでなくて、私自身振り返ってみましても、やっぱりこう、本当に言葉に出せないような思いがいっぱいあって、それを超えて、大人になっていったと思うんです。だから、今の子どもたちが、特別だと言うのは本当かどうかを落ち着いて考える必要があるんじゃないかと思うわけです。心の中で、あいつ、ぶん殴りたい、こういうことやりたい、あるいは、事件に関してもいろいろあると思うんですよ。でも、そこは、もがきながら必死に生きていくそういった時期だと言うことを押さえておく必要があるように思います。そして、激動の少年期をスムーズに行くためには、先ほど何人かの方から出ていましたが、乳幼児期の大切さと言うものがあると思います。乳幼児期の段階で、この体験すべきことを、ちゃんと体験してない。時に、お父さん・お母さんとの心の絆なんかが非常に大切なポイントだと思うんですけれども、このあたりを含めた発達課題をきちっと達成しておくことが非常に大事だろうなということを思いました。そういうことを踏まえていって、なんていうんですか、心の脱皮ですか、脱皮現象を起こしていくんです。衣を脱ぎ捨てて、先ほど森山先生が「作られた自分から、自ら自分を作っていく時代に入っていくんだ」と言われました。これが今、子どもたちがなかなかうまくいかない状態に入ってきているわけなんですね。どうしていかないかと言うと、要するに、繰り返しになりますけれども、体験すべきことをしないでただ大きくなること、知的になることを繰り返し求められてきている。この中では、何人もの先生方がいろんな角度でおっしゃられたと思うんですね。今の子どもたちは、触れあいもありませんし、お手伝いもない、勉強だけやればいい。評価も、そういうひとつの側面です、極論でいいますと、その中で、森山先生もおっしゃられましたし、猪山先生も冒頭で言われたし、それから西村先生も言われたんですが、自尊感情の問題ですね。自己評価が国際比較でも本当に低い状態になっている。西村先生が、「自分のいいところを書いてちょうだい」と言うとそれはなくて、「良くないところを」と言ったらいくつでも書くということをおっしゃったですが、そうですね、小学校ではまだいい事を書くんですが、思春期に入ると非常にマイナスな自己認識が強くなり、かわいそう。おそらく、これ、おそらくと言うよりも、いっぱいあるんですね。子どものやっぱりいいところというのは、これをやはり認める状態がないんですね。そうした状況の中でもがいている状況があるんです。例えば、私の手元に、これは中学生じゃありませんけれども、盛岡市の教育研究所のデータですが、生まれてこなければ良かったと思う事が「よくある」・「時々ある子ども」が５年生で38％なんです。生きている実感がないんです、そうでなかったならば、連合総合生活研究所の報告で、５・６年生ですが、44.5％が、「思いっきり暴れまわりたい」と答えてます。とにかく、どうしていいかわからない、自分の中にこもっていくか、こういったふうに暴れるか。ですから、何が起こってもおかしくない。そして、その状態の中で、14歳問題だったり、17歳問題だったりしているわけです。そして時間をとって恐縮ですけれども、最近のインターネットによる情報ですけれども、文部省も、これからの大学生のためには、生活指導に重点をおくべきだということまで言っている。京都大学では、ある学部では学校に来ない学生のために、先生方は、家庭訪問を開始したと。文部省は、それを高く評価したという報道がなされています。これが事実なんですね。そしてここには、朝日新聞の報道がありますけれども、生活指導が必要な東大生、という状態です。だから、青少年の問題は、17歳なら17歳という時間の流れで、赤ちゃんからずっと発達的にまず見な

きゃいけないんだろうと思いますね。さて、皆さん方が共通しておっしゃったのは、体験なんですけれども、今や、体験というものがいろいろ言われています。中教審もいってますので、学校でも体験重視の教育と言われるようになりました。しかしそれは、冒頭で猪山先生が言われました、子どもに短に体験を与えれば良いんじゃないんだ、大事なのは能動的な体験だ、と言われた。体験の質の問題だろうと思うんです。今や体験、体験と言われ、あちこちでイベント体験が行われている。この問題については、具体的な例で、窪田さんおっしゃられましたよね。あの、キャンプに行ったとしても、親が全部準備してしまって、子どもはお客さんで、楽しかった？と聞けば、楽しかったというでしょうけれども、子ども自身の本当の居場所がない。最後に森山先生が自尊感情を高めるために、ほめることが大切と。これは、そうだと思うんです。日本は子どもを褒めない文化ですね。で、「お宅のお子さんは立派ですね」といわれても、「いえ、そうじゃないんですよ。うちではもう、わがままでどうこう」とマイナス評価。それが、欧米ですと、「そうなんです、ありがとうございます。この子は私の誇りなんですよ」と、たいしたこともないことを前向きな評価ですね。やっぱりほめることが大事ですが、同時に褒めなくても自発能動体験の役割のことが出ました。小さい段階で、それぞれ自分も家族の一員として、あるいはクラスのメンバーとして、あるいは遊びの中で、役割を果していく。そこに、誰が言わなくても「自分もできるんだ」というのがあると思うんですね。そういう場がない。そこで居場所ということが言われますけれども、ただ居場所というのがあれば良いわけじゃなくて、子ども達が、なんか、こう、自発的に自ら体験をしていく、できるんだ、と、そういったことが必要だと思います。それから、皆さん方から出てきたのは、関わり、人と人との関係の問題があると思うんですね。この自分を見つめてくれる人、あるいは共に一緒に活動する人、いろんな人との関わりが子どもたちの生き甲斐でもあるんです。ここでまた育っていくわけですが、それがないということですね。これをやっぱり持続させていくというか、企画するには、どう考えても、何もしないでは関係はできない。とにかく何かいっしょにやるなかで、ご飯の準備とかをするとか、その中で、関係が出来るわけなんです。猪山先生がおっしゃったんですね。そうしないと、関係というものはただそこにいるだけではできない、と。共同体験を通して関係が出来ていく。関係の中で、こう、見守ってもらったり、心を安定させってもらったりすることがあるのではないかと思うんです。いずれにしましても、最後に森山先生が力強く強調されていましたが、私達の生き方そのものを変えていくことが大切なんではないか、変えていこうではないか。と。そうだと思うんです。子どもが、というよりも、私達の生活そのものがおかしくなってきている。そういう中で、子供の生活、関わり方に反映、関わり方が、子どもの体験に反映、それを、子どもが、生きる実感を感じ得ない状態になってきている。で、このあたりをやはり見つめなおしていく必要があるのではないかと思います。但しそうなりますと、これは私の見解ですが、多くの方が、昔はこうだった、あるいは開発途上国はどうこうと、昔の生活に帰ろうとしてしまう。そうではなくて、豊かであることは悪くない。便利であることも良いんですが、子どもたちは１年２年、10年20年で本質が変わるわけじゃない。ですから、子どもにとって、やっぱり、赤ちゃんから20歳までかかって育ち心を脱皮していくわけですから、心を。そんなことが出来るようにもっていくその為の努力が必要なんじゃないかな、と思います。ちょうど環境問題と同じじゃないかと思うわけなんです。時代がこうだから、ゴミはしょうがないじゃないか、二酸化炭素はしょうがないじゃないかといったら、どうなんなんでしょうか。もう、未来はないと思うんですね。今、私達は踏みとどまらなければ行けないんですけれども、どうも、そこが分かってないんじゃないか。時代がこうだから仕方ないというかたちで全部時代のせいにした、社会のせいに。私達は、子どもたちの視点から、今何が求められているのか見なおす必要があるんじゃないか。４人の皆さん方は部分的には違うといいますか、意見のぶつかり合いというよりも、いづれも、大事な点をどう関わっていくのか、そういったことが述べられていたんじゃないかと思います。時間は、本当は５分でしたね、先生すみません。ということで、どうもありがとうございます。

上野

どうもありがとうございました。それでは前半の部分をですね、これで終わらせていただいて、今から休憩に入りたいと思います。また事務局から資料についてのお断りですが、予備の分を含めて150部しか印刷していなかったものですから、この会場の中には、お手元に資料がない方もいらっしゃると伺っております。どうも申し訳ございませんでした。頂かれてない方につきましては後日郵送させていただきますので、ご了解いただきたいと思います。よろしゅうございましょうか。もし、資料がまだ欲しいとおっしゃられる方は、事務局受付のほうに、申し出ていただきますようお願いいたします。

（休憩）

上野

それでは、後半戦に入りたいろ思いますが、今、四人の先生方に、提言をいただきそして横山先生に簡単なまとめをしていただいたんですね。やっぱり乳幼児期の重要性、発達段階の未消化の問題も出てまいりました。そしてそういった発達段階を潜り抜けていく中で、子どもたちが自尊感情をなかなか得られない問題として、そこでどうも欠落している体験があるのではないか。かといって、逆に体験さしたからといってそれでよいのかといった問題も出てくる。さらに、空間、子どもたちの居場所があれば良いって風に言われますけれども、居場所があればいいというだけでとどまっていてはいけないのであって、そこでいろんな人間関係が組まれているのか、そういうことまで考えていく必要があるのではないか等々ご意見をいたいたかと思います。そこで、先生方の御提言のみならず、今日ご出席の皆さんが日頃疑問に思ってらっしゃるとか、これはどういう風に考えたらいいのか、この問題について、後半の最初の方でいろいろ出していただければと思います。それで、これらのご意見をまとめて、シンポジストの先生方のご意見を再度頂きたいという風に思っております。宜しゅうございましょうか？この休憩時間短かったですけれども、いろいろご質問、ご意見など出していただければと思っております。宜しゅうございましょうか。どなたからでも結構でございます。

男性

はーい。

上野

じゃあ、お手があがっておりますので。すみません、このマイクを持って頂いてよろしいでしょうか。ピンマイクはどちらにありますでしょう？ではお名前と…よろしければ所属とかもいっていただきたいのですが。

男性

では、諸先生方にお尋ねします。今日、私、お話承っておりますと、宗教倫理による教育、というような言葉が、ぜんぜん聞こえてこなかったんですが、どういう風にお考えになっておられるのか、お尋ねいたします。

上野

ありがとうございます。それでは、もう一人、お手が挙がっております。はいどうぞ。

男性

はい。えーと、僕は九州工業大学４年生の桑木明弘といいます。僕もちょっと、質問が似ているかもしれないんですが、今日のお話ずっと聞いておりまして、やっぱり、認めてあげる、誉めてあげるということが重要であるということだったんですが、この、認めてあげる、誉めてあげるというのは、とても、僕、難しいことだと思います。何を誉めて、何を認めてあげれば良いのか。で、間違えたことを誉めてあげたりとか、なんでもかんでもみんな認めてあげたりしていたら、子どもたちも好き勝手放題やっていくわけで、そこの基準というのが難しいな、と思います。その中で、森山先生が今からは、関係の豊かさなんだと、つながりを大切にしていくことが重要なんだということをおっしゃられました。ということは、お父さん・お母さん・兄弟で、おじいちゃん・おばあちゃん・先生や仲間と、そういうような人たちとのつながりの大切さだと思います。だから大切にすることが出来たときに認めてあげたり、誉めてあげたりすればいいのかという風に

思ったんですが、じゃあ、一つ一つ現実場面でいったら、やっぱり、自分自身の価値観に左右されている。すごい難しい問題だな、認めてあげる、誉めてあげる、とっても難しい問題だなって思って聞きました。森山先生の中で、修身でない、人の生きる道が出てこなければいけない教育いうことだったんですけれども、あの、ひとつですね、犯罪発生率のお話の中では、日本とか韓国とか、儒教国の犯罪発生率低さというものが出てたと思います。後はこう、僕自身、ひとつのものの考え方とか、体験というものは、表裏一体のものではないかなっていうようなことを考えています。それはどういうことかというと、本を読んだりしたりするときにわくわくしてきますよね。司馬遼太郎の、「竜馬が行く」読んだりとかですね、こう、わくわくしてきて自分の生きる道っていうのが、見えてくるんじゃないかなって思います。で、ただ、それを読んだだけだったら、ただの理論やさんなわけで、それをみんなと、体験を通して実感があるものにしていくと。いうようなことになっていくんですが、そういったのが、僕は修身じゃないかなというイメージを持っていたんです。修身ではない人の生きる道が出てこなければいけないということでしたのでそれはどういうことなのかということをお聞きましたいと思います。よろしくお願いします。

上野

はい、ありがとうございました。今のは森山先生にということで宜しいでしょうか。それでは他にどうぞ。

女性

あの、森山先生が思春期を「作られた自分から、これからは作る自分、自分を作っていく」ということを言われましたけれども、その、自分を作っていくというときに、今の宗教の問題ではないんですけれども、私は、この子育てというものに、父性というものが非常に少ない。今日も、お母様はご登壇なさっておりますけれども、お父様というのも、時々は、ご登壇しても良いのではないかと。で、この、自分を作るときになったときに、生きるとは何か、社会とは何か、そういうものを語ってあげるものがいないと自分を作る術が無いんじゃないか。全体的にもう、父性が欠落している。この部分にちょっと触れていただきたかったなというふうに思います。

上野

ありがとうございました。それでは、もうひとかた、向こうのほうでお手が挙がっておりますので。

女性

えっと、私は、飯塚から来ました曽根と申します。えっと、私、もう少し具体的な話がしたいんですが。窪田さんとそれから森山先生の話ですごく私も共感したんですけれども。私飯塚に着て二年になるんですけれども、その前、栃木県で子ども会活動をやっていまいした。今とにかく、昔の生活の方が良かったのではないかとか、いろんなことが簡単にできるというか、わりとすぐできると思うのは、私、子ども会活動みたいなのを、生活体験とかいろんなのを含めて、活発にしていかなければいけないんじゃないかとずっと思ってます。窪田さんが最後の方で、価値観を変えていかなきゃいけないんじゃないかといわれましたけれども、お母さん方、私達を含めてですけれども、受験教育ずっと続いてきて、やっぱり、勉強できる子はいい子なんだということが中心になりすぎたと思うんですね。学校も、親・家庭も含めて、地域の中で子ども会活動のようなことがもっともっと活発に私はなされなければいけないと思います。

子ども会活動が不活発になる理由は、お母さん方が、塾に行くことと例えば子ども会、子どもが、窪田さんたちのお手伝いと塾と、ということがありましたけれども。同じことで、子ども会が明日あるんだよ、というときに、塾があればやっぱり塾に行ってしまうみたいな、ことがあると思うんです。これだけやっぱり成績が良かったといわれる子達が、いろいろ問題を起こすということを、もっともっと親達が、本当に真剣に受け止めなければいけないんだと思います。

塾などよりも、人間として育っていく中で、いろいろな体験、もっと大きい、基本的生活習慣とか含めて、もっと大事なこと、人間との関わり方とかいろいろあるわけで、そういうことのほうが大切だということを、親がまず認識して、そういうことを子ども達に体験させなければいけないということを、真剣に受け止めな

ければいけないと思います。

それと、もうひとつ、森山先生が、小学校をひとつの核にして、といわれた。これ、ほんとに、これからおそらく学校が、生徒が減ってきますので、空き教室なんかできるので、この前テレビの金八先生で中学校の中にお年よりのデイケアみたいな場所がありましたけれども、何かそういうような、お年寄りが来れる場所とか、あるいは逆に就園前の子ども達がお母さんと一緒に集える場みたいなのが、空き教室にできるようになると、子ども達が小さい子と触れ合ったり、あるいはお年寄りと触れ合ったりして、子ども達の状況も変わってくるかなと思います。子ども会はもちろん、窪田さんがいわれたと思うんですが、大人がみんなほとんどやってしまってね、ちょっとだけ子どもが、っていう子ども会活動ではだめなんです。ほんとの子ども中心の主体的な子ども会活動とか、そういう、小学校とか中学校を中心とした、学校を核にした、いろんな年齢の方が集まったようなコミュニティ作りが出来ている。割と、それなら、比較的、今これから簡単に出来ていくんじゃないかな、と思いました。以上です。

上野

じゃあ、向こうの端の方から順番にお願いします。

男性

え、北九州で社会教育主事をやっております、山下といいます。森山先生でしたか、豊かな、真の豊かさと言うことで、関係の豊かさ、関係についてお話になられました。全くそのとおりだと思うんですが、私、地域での豊かな関係作りをいろいろと考えた場合に、やっぱり、新しい地域共同体の再生、ま、キョウドウタイも、あの、協力する、に、働くを書いたほうがいいと思うんですがね、そういったその、協働体の再生だとか、あるいは、地域の教育力を高めるだとか、あるいは、地域の結びつきのネットワークの役割ですね。あるいは社会教育施設の果たす役割、つまりその、地域のいい関係作りを作っていくところのKey station、あるいは、key person といったところをどこが担うのか、そこのところがあまり論じられてないようなきがするんです。非常に、そういう点では、社会教育が今からそういった問題を果たしていかなければならない役割の大切さというものを感じます、強調していかなければいけない時代ではないかという風に痛感しております。　特に、社会教育の中核施設の公民館などがですね、だんだんと、やはり、生涯学習時代の中で、影が薄れていくような、まあ、地域によっては、そういうところもありますしね、そういった風潮の中で、公民館の無いところはどうするんだという問題もありますが、そういった、役割の大切さを再度、広めていく、再確認していく必要があるんじゃないかということを申し上げます。

上野

はい、ありがとうございました。その辺で何人かお手が挙がっておりますね。はい、じゃあどうぞ。

女性

はい。中津市から来ました。保育園をしています。私もあの、臨床心理士の西村先生の言われた発達の未消化のところで、保育園で0歳児の産休明けの沢山の子どもが入ってくるわけですね。その時に目をあわすとか、喃語を話すとか、おはしゃぎ反応とか、探索活動をうんと保証するとか、そういうところの親の学習が、非常にうまくいかなくて、3歳児神話とかよく言われるんですけれども、そこの段階からの親の学習が非常に難しくなっています。関係性の回復と言われましたが、それを具体的に展開する時に、さっき、私も同じ事を言おうと思ったんですが、キーパーソンになる人が、フリースクールの場合とか、そういう小さい子のカウンセリングをするときに、どこがキーパーソンをするのかをお尋ねしたいな、と。実際展開する時にですね、私たちも子育て支援事業してて、沢山のお母さんたちが来るんですよね。年間4000人くらいの利用の人が来て、ほとんど0～3歳児の方が多かったんです。で、その方たちが具体的にそういう大事さが分からないんですね。それを学ぶ場所、それを横でつなぐところのキーになる人がどこなのか、それを今からどうして行くのかという展望を聞きたいなと思いました。お願いします。

上野

ありがとうございました。

女性

あの、おせっかいおばさんをしている姫野と申します。久留米から来ました。福岡県全区でおせっかいをしているんですけれども、今の、保育士の方のお話ですけれども、私たちおせっかいをしましてね。今はもう、マタネティのおめでた学級の時からおせっかいをやいているんですね。そして、おもちゃ作りをしながらおしゃべりしたり、お友達をたくさん作ってサークルを作って。そして、お産の時には、私たちにお声がかかるんですね。で、お産の訪問をいたしまして、そこでお母さんとの交流といいますかね。私たちの失敗例を沢山お話して、こんな失敗をしたんだよ、って言うことで、ここで、お母さんにうんとお母さんらしくなってもらって、私たちのほうがお母さんに対しても、お子さんに対しても「かわいい、かわいい」の連発をする。そりゃもう、かわいいね、かわいいね、で一日終わるだけで、お母さんもそれでニコニコしている。私たちが、おせっかいしてるのは、皆ボランティアで駆けずり回ってるんですよね。でも、私たちの生きがいになっているから。まあ、地域おこしの一環として、生きがいの、こんなおばさんがいるというのはですね、皆さんに伝わればいいかな、と思って。

ボランティアもですね、17歳18歳とかいるけど、今、久留米も居場所がないそういう年齢のお子さんたちをですね、私たち、ボランティアで結局そのおしゃべりの場所を、どっかで定期的に設けようとかですね、ボランティアが立ち上がってやるのが一番やりやすいっていうか、なんかしやすいなあってのが、やっと実感がわいてきたところです。

行政にもボランティアでこんなのやってるから来てくれるか、とか、協力してくれるか、とか、言いやすいんですね。だから、どこどこに行って、形にとらわれたら何かやりにくいですね。結局、もう、おせっかいを０歳から20歳までやらせていただいてるのが私たちです。以上です。

上野

ありがとうございました。

男性

所属ということになるのかどうか分かりませんけれども、少年院で非行少年のカウンセリングみたいなことを、相談面接員というのをやっております。地域との関わりとか、体験学習とか校区コミュニティーと地域との関係、すばらしい例として一つ紹介させていただきたいんです。私は、いや、私はというよりも、福岡市の近くに二日市温泉というのがありまして、筑紫野市っていいますけれども、そこを、筑紫野市の青年会議所の皆さんが主催されています。市の教育委員会がバックアップしたんですけれども、子ども達を、小学生４・５・６年生120名連れてですね、この８月に100キロ、４泊５日100キロ歩行友の会といいますが、これのボランティアに、私12時まで参加してきたんです。ボランティアは約60名。主として、若い学生男女の皆さんで私のような年配は、まあ、10名位ですかね。で、一昨日も12時までやって、夜、懇親会っていうことだったんで、私、懇親会なら、きっとビールがあると思って非常に楽しみにしてたんですが、麦茶で乾杯をするという。これは、まさにその通りだな、って思いましたが。あの、何ていいますか、さっきの方がおっしゃられた、褒める、叱る、ということをこれも徹底的に繰り返し…。ボランティアの研修会は４月から始まりまして、もう何回になりますか…、相当の時間をかけて、運動会でも、あるいは、水泳でもキャンプでも、そういうことを避けようとする世の中に、小学生を連れて100キロ歩くというのは、大変なことなんです。一番はやっぱり完歩させるということ、これはおそらく、100キロ歩けなかった子どもは、生涯にわたって大きな挫折、それから、出来た子は非常に、嬉しさに、素晴らしいことになるということです。

体験されたお父さんの子どもさん、そのお父さんがスタッフなんですけれども。その話は昨年の、一年前の話なんですが、その話をされると言葉が詰まって声にならないくらい感動された。子ども自身も得るものが多いんですが、応援するスタッフ、ボランティアが、反面、得るものが多い。こういったような活動が、これで３回目だそうですけれども、今後ずっと続いていく。で、また、それを継続した中学生が、やっぱりスタッフとして参加するという素晴らしい活動の実例。こんなものがもっともっと増えていくといいなあ、と思います。私が何故、こんなことに取り掛かったかということは、やっぱり、非行少年とも10年付き合って

きましたし、暴走族だ、とか、何だとか、やっぱり自分の事を評価されたいから、あの、暴走と言うか、そんな無茶苦茶な事をやるわけなんです。その少年を認めてやる、評価をしてやると、褒めるというよりも認めると、どんどん心を開いていく。生き生きとしてくる顔が、表情が見て取れるわけなんですね。それがやっぱり、必要なのです。さっきおっしゃった、一歩一歩、一人一人が関わりあいを大事にしていくということをですね…。昨日、一昨日、ある御住職の方と話をしていてなるほどな、と思ったのが、最近葬儀がですね、昔は葬式行くと沢山集まっていたのが、だんだんだんだん最近は数を制限する。身内だけにしよう、とか。さっき西村先生がおっしゃっていた個のスケジュールの集団、個のスケジュールを大事にして、集団のスケジュールを無視すると、もう、来れない人は来れなくていいや、ということで、だんだんだんだん、その輪が狭まってきているような気がする。いかにやっぱり、地域、人と人との関わり、妻と夫の関わりあいだとか、親と子の関わり合いだって、勉強ということだけしか、おそらく関わっていない。

上野

えー、なかなか…。最後よろしゅうございますか？……では、後ろの方。

男性

こんにちは。私は久留米市に住んでいます。高校の教師をしています。それで、今日のタイトルである17歳という文字が印象的でした。こうしたシンポジウムが持たれたということは、とてもすごいことだと思い参加しました。私は、17歳ということでしたから、なぜ、17歳、17歳、17歳と犯罪が続くのか、だから、17年前のことを調べてみました。そうすると、17年前は、少年非行、離婚、戦後最高とありました。それで、そういうときに生まれた子ども達を、お父さん・お母さんがどういう風に育てられたから、こういう事件が起きたのか。言い換えるならば、生活体験の中の何が欠けていたのか、それをどう埋めていくのか、それを、学問的な形で追求していって欲しいなと思います。それと、生徒の家に喫煙問題なんかで行くんですが、ほとんどの生徒が今は中一からタバコを飲んでます。これはもうびっくりします。で、万引きなんかは、だいたい中３から始まる。この事実を知ったときに、私たちはどうしたらいいのかなと思って、じゃあ、私たちにできることは何なのかなあといったのを、先生方と一緒に少し教えていただけたらと思います。

上野

はい、ありがとうございました。それではですね、今、10名くらいの方からご発言いただきましたけれども、繰り返すことはいたしませんが、大きく何点かにまとめられるかと思います。で、一つは、宗教・倫理の話が最初に出ましたけれども、やはりこう、修身ではない人の生きる道と言うのの提示の仕方ですね。それはまた、性の問題とも関わってきますけれども、ややもするとこういった論調の中では強い父性が復権することによって、問題が解決すると言う議論が簡単に成り立つって言うのも疑問なんですね。やはり人の生きる道と言うのを父性のありようと関わってどう提案しているのかと言う問題が一つあるかと思います。それから、親の認識というのが今非常にデコボコがあって、それを先程、保育園の先生がおっしゃいましたけれども、アイコンタクトをとることすら非常に難しいような子どもの親の学習をどう組織していくのか、そしてそれを、誰がどういう風にして、地域の中でも組織していくのか。これ、矢口さんからもご質問でましたけれども、そういった問題があるかと思います。それから三つ目は、個と個の関係、要するに、こういった問題が起こると広く社会とか、広く地域一般に、問題が影響されるからなんだけれども、具体的に、個と個のコミュニケーションやそういった関わりを広げていくような手立てというものは、どういう風にしたら

成功できるかという問題。それから、学校の問題も出てきたと思うんですが、開かれた学校というのが今さけばれているわけですが、西村先生の御提言の中にもあったかと思いますね。そして、開かれた学校のあり方と同時にですね、最後に森山先生がご発言されましたけれども、17年と言うのは一体何だったのかということを、考えてみたときに、少年非行、離婚等が、17年前最高だったというお話だったんですけれども、今の子ども達、17歳というのは、新学力観の第一期生ですよね。意欲・関心・態度を評価され始めた年代の子ども達ですね。ここで、意欲・関心・態度までが評価の対象とされてしまった子ども達の経験してきた体験というのは一体何なのかということも含めた問題として捉えていく必要があるのではないかと思います。これは、まあ、私のほうで簡単にまとめたものですから、どの点からでも結構ですので、各先生方から、ご提言いただければと思います。では、猪山先生から、お願いします。

猪山

私の方は、最初にちょっと抽象的な枠組みを話しましたので、具体的な話はなかったんですが。…時間は一人何分くらいで？…５分くらいですね。私の方は基本に関わるかもしれませんけれども、４つくらいのことをお話を聞いたことを問題提起という形で位置づけたいと思います。さて、一番必要なのは、生きる方向というか、倫理性、道徳性といわれるものですね。今、非常に危うくなっているということは、これはむしろ、子どもの問題以前に、大人が非常に危ないということです。最近の企業研修なんかに行くと、“儲かればどうでもいいんじゃないか。人のことを考えとったら生きていけん。特にこういったリストラのときは…”ということがあります。企業なんかも非常に危ない。企業関係が危ないということで、通産省が今一番力を入れているのは、社会の方向、人との関わり方をどうするのか。企業、大人社会が言ってることなんですね。

何故、こういったことが起こったかというと、これが非常に難しいところで。言ってると長くなるんですけれど、実は今まで日本は道徳できたんですね。この道徳は何かというと、“人に迷惑をかけるな、人に合わせて”という形で、つまり、やわらかくいうと、家族でも、地域でも、地域共同体を維持する秩序意識を大事にするということなんです。これがもう、はっきりいって、20代以下の文化はヨーロッパの個人主義だから、逆に道徳じゃなくて倫理になっているんです。それで、私は、将来的に日本は、一番最初に言われた方がおっしゃったように、いま、ここで倫理教育を打ち立てないと非常に危なくなっている。ただ、もう、誰もが学校の教師となるなどは出来ない。それで、倫理というのは、個人が神との関係とか、社会との関係できちんとした、誰から言われなくても位置づけるということです。学校でやれとかではなくて、多くの人が言いましたけれども、新しい、人間の関わり方ですね。

しかも、一人一人が違う手と共同しようという、皆とあわせるというのは、40歳以上しか通用しないんで、もう、30歳代もこの中におられる人は、もうそれはいやだと思っているに違いないんですね。もう、10代20代に通用しないけれども、それでしばっているから、いじめの問題に来ているわけです。私もまさに道徳教育は通用しなくなったので倫理教育を作り直さんといかんと思います。

これには時間がかかるので、具体的に、特に、関わり、人と人とはですね、関わりあう場面をつくって互いを大切にする、そういう行動を、家族や地域や学校の中に創作する必要がある。

二つ目は、私に関係しているんですが、地域の子どもの居場所も大切ですけれども、生きる場所をつくらないかん。どういった方向でつくるのか、森山先生は、校区コミュニティー、多分、中身は一緒だと思いますが、これは、久留米が一時目指していて私もアドバイザーで行っていたんですけれど、残念ながら、市長が代わって駄目になったんです。この前、阪神大震災で神戸がそのことをやっていたんですが、学校とか公民館、福祉施設の３つがやっぱり、地域で大事だと思います。学校と公民館と福祉施設ですね。この、人が育って、支えあって、基本的な生活スタイル、この３つを合わせた、出来たら一番核につくる地域のセンター、この３つと特に合体してつくる、神戸の場合は、それが一番深く早かったという結果で、神戸はそういう方向に向かっているんです。

私も長崎の島原でそういったことを今年からやっているんですが、それが大事で、それプラス、既存の教

師や公民館主事さんや…だけでは駄目で、そこでやっぱり深く関わる、西村さんのような社会性をもった深いコーディネーター、カウンセラー等をそこに受託することも大事なんじゃないかと思います。それから、もう一つは、学会でもこういった質問がありました。今みたいに科学技術の時代がこれからむしろ資源のない日本では大事なのに、体験体験といって知識をお前は否定するのか、ということです。はっきり言いまして、これは批判も受けると思いますけれども、これは昨年から大学生たちとの関係で日本の21世紀をどう考えるのか。森山先生は関わりの点で言いましたけれども、もう一つ社会の活力をどこでつくるのかと言う、ある、国のプロジェクトに入りまして、私は改めて分かったんです。やっぱり知識は大事なんですね。ただし、今までのように出来合いの知識を受けるのでなくて、体験をじかに学んだ知識こそ強化しようと。

これから、高校入試はなるべくやめて、大学の入試をそういう方向に転換しようと、文部省も今、基礎研究を始めてるわけで、私もちょっと参加しているんですんです。

まあ、そういったわけで、知識か体験かというのじゃなくて、体験を踏まえて実感があって、分野分野のバラバラじゃなくて総合的に物事をつかまえるために21世紀的な知識的な社会をつくらないと日本は危ないんです。そのためにこそ、人間の関わりとか、もっと人間らしさとかいうことと同時に、そういう20世紀のような学校、与えられた知識、じゃなくてそういった、つまり体験の意味ですね。体験は与えられたものじゃなくて、自分達が計画し、作ることですね。

最後に、私は、コミュニティーをつくるというのは30年前から実際に言っているんです。それで長崎でも２箇所くらいやってるんですけれども、私は、子どもの今、子どもを中心にすえるということがですね、最も福祉のボランティアもあるんですけれども、介護保険の改定で追われて、子どもを中心に新しく、これから自分達大人の生きる共同体をつくる必要があります。子どものためにじゃなくて、大人我々が、関わりを失って、家庭の中に、あるいは職場の中にぽつんといるわけです。したがって、子どもを媒介とすると、日本の場合は最もコミュニティーが出来やすいので、そういう点からも子ども自身の未来のためじゃなくて、大人自身が真剣に作ることです。子どもが言います「そういうモデルにする、親にしたって教師にしたって社会にしたって、手前らのどこに模範があるのか」と。私、何人か、この間中学生、高校生と座談会をしていていわれました。その時にやっぱり、依然として、大人、子どもをどうするか言っているけれども、僕ら自身の関わりや社会参加を含めた、一つの具体的なコミュニティーをつくっていくときに、子ども達と一緒につくるというように、発想する時代が来ているわけで、子どもの問題を決して子どもだけに話して考えたらいかんなあと言うことをさっきも色々な方が言われましたが、改めて学ばせていただきました。

西村

あのー、非常に質問が深いなあと思いました。私の考えでは、宗教倫理と政府の色んな兼ね合いがあるんですけれども、私たちが生きていく時にバランスをとっているのは何かなあと思って、それはやっぱり守るという宗教倫理と関わりがあるのかもしれません。自分の中にある守りというのがあるかどうかが非常に大切なんじゃないかという感じがします。日本というのは母性社会ですので、“おかげさまで”とか“お互い許しあえる”とか“まあまあ”といった社会だったんですけれども、その母性の部分のところが果たして守りになっているのか、自分の事守れているから、さっき私が言いました、委ねる事が出来るという体験が小さい頃から出来るかなあということが、とっても大事なんじゃないかな、という感じがするわけですね。そうしてみると、反対側にある父性というのは、私は人間の中に必ず、皆さん方にも私も含めて父性と母性はあるわけでして、もっと言うと厳しさや優しさがあるわけです。そして、それをその場その場で出してるわけですね。だから怒らないと厳しくないといけないときに、厳しくする人もいるし、とってもそれが苦手な人もいるわけです。厳しく出来ない人もいるわけで、それは、自分の中の父性と母性の問題なわけです。そういったときに、父親の役割といっても、父親の中にも、とっても父性が強い人も、母性が強い人もいるわけですね。それをお母さんが父性でカバーしている場合もありますよ。お母さんとっても厳しくて、お父さんとっても優しい、とかですね。それはですね、要す

るに夫婦の中での父性と母性のバランスですので、それはそれでいいと思うんですね。ところが、女性が父性を一生懸命出しても似合わないわけですよ。子どもにとって、とってもきついわけですね。子どもが求めているのはやっぱり僕はあったかい母性の部分のお母さんに求めるし、そういう部分、強さとか、そういう厳しさをお父さんに求めていく姿があるわけですね。そういうときに、私たちの中の母性とか父性を、子どもが色んなサインを出した時に、子どもの問題として捉えると同時に、自分自身の問題、自分の中の母性はどうだったかなあとエネルギーが消耗して母性が足りないなあ、とか、あるいは、いつもぴりぴりしているなあ、とか、自分の中の母性と父性を一回点検するということが大事なんじゃないかなあと思います。それと、キーマンの先程の保育園とかそういったところのキーマンの役割ですけれども、私も実際に乳幼児健診などで保育園回りを。実は私は、乳幼児健診で、お母さん面接だけを、子ども面接だけをするんじゃなくて、保育園をずーっと回っていく。そうすると、先程フロアーから出ましたように、お母さんがお母さんをやれない、やっていない人たちが沢山いるわけですよ。そういったことで、私がもっととっても気になることは、２・３歳の一番大切な時期に、それはもう、女性がどんどん社会に出てきていますのでそれはいいことだと思っているんですけれども。排泄の問題ですよ。トイレットトレーニングのところを、他人の手で、お母さん以外の人がやらないといけない時代がいっぱい来ているわけですよ。そこをもう一回ですね、保育現場とか行くと、乳児期幼児期を育てる人たちはもう一回見ないといけない。それはどういったことかと言いますと、乳幼児期にトイレットトレーニングするって言うのは、初めての自立、なんですね。安心した人の前で自分の排泄物を出せるということ。そうすると、そこで褒めてくれる。出したら褒めるということが、思春期で自分の感情を出せるということと、とっても深いつながりが出てくる感じがします。だから、その辺のところを、私は、保育園とか幼稚園でお世話をされる側が、保育士とか幼稚園の先生方がその辺のところをもっと踏まえた上でやっていく。それは、お母さんが悪いとか言うんじゃなくて、子どもに関わる人がきちっと認識してやっていかなければいけない。それを先程の親が親として、どれほどやってるのかというのはとっても確かに疑問に思うのは、今の20代の若いお母さんたちの親の人たち、というのは、50代、60代なわけですね。そうすると、その人達が今度は若かった時というのは、60代とかの人たちはとっても楽しみたい時に、とっても大変な思い、戦争とか、してるわけですね。今とっても60代の人たちは青春しているわけですね。それは昔と違って、60代の人たちもとっても元気で自分たちの事に一生懸命なわけですよ。だから、それぞれ自分の事をしだしている時、その中に子どもがいるって事を考えた時に、子どもを育てていくためにはその辺踏まえて関わる人達がどのように手を組んでいくかとか、子どもの発達みたいなことをきちんととらえるかとか、そういったことが、とっても大事なことだと思うんです。そこで、チームの誰かとなってくると、今のところコーディネーター的な人たちっていうのが、とっても、日本の場合には少ないわけですよ。それは、欧米ではきちんといます。学校の中でも、学校のスクールカウンセラーだけじゃないです。コーディネーター的に専門家がずっと入っているはずなので、これから、多分日本の行政の中でそういった人達が社会教育も含めて入らないといけない時代が来るのかもしれないと思いますけれども、とりあえず、私たちが今、自分たちで出来るところでは保健婦さんとか地域の方たちと連携を取ってその場で誰が鍵を握るのかということです。例えば、私が行く場合もあります。あるいは、保健婦さんが行く場合もあります。それこそ今やらないといけないのは、そこにいる人たちの関係性だと思いますね。どんなに関心を示して動いていくか、だから、どれだけ我々が仲良くできるか、っていうことですね。先程、自分の人間関係はどうですか、とフロアーからありましたけれども、もちろん原点はそこだと思います。自分がどれだけ関係を築いているかということも問われると思います。それから、先程、開かれた学校ということですけれども、例えば、学校自体も大変忙しくなっているんです。いつも学校の先生方にもっと整理してほしいというのが机の上にのっているわけですね。職員室に行くと、とっても積まれている。あれは処理できないんじゃないかと思うくらい。私、冗談で「自分の机の上は人生の縮図ですよ」という話をするんですけれども、それくらい沢山仕事

があるわけですね。そんな時に開かれた学校って、とっても大変なんだけれども、まずは、親御さんたちや地域の人達が学校に関心を向けるためにはどうしたらいいのかアイデアをやっぱり考えないといけない。具体的には、花壇作りをする、野菜作りをする、とかですね。学校の先生はされているけれども、そういったものもいいんですが、そういったときに地域の人を呼んでみるとか、いっぱい色んな方法が転がっているような気がするんですね。だから、そういう風に着実に自分達が出来ることをしていかないと、行政が何だって、今言えないんじゃないかなって気がします。最後にお父さんの役割が出てますけれども、お父さんがお父さんの役割を家の中でどれだけしているのかということと、お母さんがお父さんとどれくらい関わっているのか、ですね。母子密着とお父さんの離れ具合は、母子密着が強ければ強いほど、お父さん、向こうに行ってしまっているわけですよ。だから、その辺のところを、きちんと、家の中で考えないといけないんじゃないかな、という感じがします。

上野

ありがとうございました。それでは、窪田さん、お願いします。

窪田

義務教育になると私の専門分野じゃないものですから、まぁ、責任を持った発言というのができないと思うんですけれども、父性ということでは自分の家庭のこととか周りの家庭のこととか考えると一言いえるかなと思います。お父さんって忙しいんですよね。だから、疲れてきて仕事からぐたーっと疲れたところへお母さんから、父性を求めて子どもと話してくれとか、子どもが今こういう状態なんだけれども、っていう風にバーっと言われると「ちょっとやめてくれ」と仕事に逃げ込んでしまうっていうことって結構どこの家庭でもあると思うんですね。そうなると社会のシステムを変えて行かなくちゃいけないというふうなところを大きなところに話がいってしまうと思うんです。けれども子どもが大きなサインを出したとき、それを一番早く感じ、一番身近にいるには母親だと思うんですね。そういう時にどれだけ父親が子どものSOSを感じ取ったり、母親のSOSを感じ取れるかっていうところにかかってくるんじゃないかな、という風に思います。私が子どもたちにガーっと言うとですね、うちの夫は一緒にがーっとは言わない。だからさっき西村先生からもありましたけれども、やっぱり父親の役割、母親の役割、得意不得意があると思うんですけれども、どっちかといえばどっちかが黙ってみている。その時には父親が必要だなって思った時、困った時にいえるだけいつもこう、子どもを見ている。そういうふうな父親のあり方っていうのが大事だし必要になってくるんじゃないかなと思っています。子育て支援の話ですけれども、今、親の認識、親の学習をどう作っていくのか、私たちの子どもの文化ネットワークも乳幼児の子育て支援ということで講座をすると、何年も前から定期的にやっています。いろんなところでいろんなそういう学習の場ができていると思うんですけれども、それをつなぐネットワークがなかなかできていないというのはやっぱり問題点として挙げられると思います。そこに、さきほど西村先生のお話にもありましたけれども、コーディネーター、このようなところでこういうふうなことをやっている、この方の問題にはこんなふうな学習の場が必要なんじゃないかっていう１人１人の個を大切にしたコーディネートがこれから必要になってくるんじゃないか。そういうふうなコーディネーターを作っていくことがすごく大事だと思います。こんな活動をしていく時にやっぱり公民館の役割がすごく大事だとおもうんですね。つまり、社会教育の役割になってくるんですけれども、学校と公民館とか地域をつないでいくその場所の役割を、場所を提供するのが公民館が最適かなというふうに思います。でも公民館って私達市民活動、地域活動しているほうからいうとあまり使い勝手がよくないんですよね。そこをどういうふうに地域から、地域に一緒にやっていきましょうっていったときに、私達といっしょに手を組んでやれる公民館であり得るのか、そういうところを市民から提示していかなくちゃいけないと思います。人と人とのコミュニケーションをどうとっていくのか。やはりあの、私たちがこういうふうな、皆さんお忙しいのにこの場にお集まりいただいて、こういうふうに皆さん議論して、じゃあ、帰ったら自分で何ができるのか、周りの人とどんな話ができるのか、そういうこ

とでしか広がっていかないと思うんですね。それって、私は自分の子どもにどういうふうな話ができるのか、地域のお母さんにどういう話をしていくのか、そういうふうなことで少しずつ少しずつ地域の輪が広がっていく。そういうふうなことを大事にしていきたいなと思います。

上野

ありがとうございました。では、森山先生のほうから。

森山

みなさん10人の方々の質問は５分間でいえるようなことじゃない、それだけの深まりっていいますか、そういうご質問なりご意見だったと思います。
私は５分間での発言ということですから、４点にまとめてみました。

第一は宗教、倫理、修身です。私は宗教教育とは、人間の無限の可能性と限界を教えることであると思っています。何々教を教えるとかどうのこうのではなくてですね、人間には、やっぱり無限の可能性があって、かつ人間は限界があるんだ。こういう宗教教育というのは是非しないといけない。これは教育基本法にもでてきているわけです。そういう意味では、修身というのはもともと身を修めるということで言葉としては大変いいことなんです。私が修身ではなく人の生きる道というふうにいったのは、そういう点では修身という身を修めるという言葉で行われた道徳なり倫理教育というのが軍国主義なり国家主義の中でどのような役割を果たしたかを反省するからです。そういう意味からあらたな倫理教育ということが必要といっているのです。Ｅ、デュルケームなんかも産業化社会の変動期にモラルエデュケーション、道徳教育を必要だということをやっぱり言ってるわけです。父性に関しては西村さんなり窪田さんと通じますので、それくらいにします。

九工大の桑木さんからの意見です。皆さんは、いろんな形で筑豊に残ってずっと子ども会をやる、コンピューターの技術をもとにですね、そういうことで言われて何度か会ったことあるし、本を読むとわくわくして体験を通して実感する、そういうこと自体が修身と自分は読むと。そういうことだったら私と共通する。そういうふうに思います。本を何度も読む中で20代で読んだときと50代で読んだときと全然違うんですね。そういう体験を、知識との出会いなどが大事じゃないかと思います。

２点目はいわゆるコミュニティーと公民館の役割でいくつか質問でていましたし、意見が出ていましたが、飯塚の女性の方が言われたそういった方向が非常に大事じゃないか、それを実現するのは県のアンビシャス運動も含めてです。従前の共同体の復活とか新たな居場所をなくしたり管理的なことになっていくのではなくて、個がひらき、個性がひらいてかつ共同していくというですね。新しいソフト産業社会の小学校区コミュニティーが出てくる必要があるんじゃないか。それは先程猪山先生がいわれましたけれども神戸って言うか兵庫県でですね、トライヤルウィークと言って一週間学校に中学生が行かない。震災の後の試みです。学校に行かないで何をするかと言うとガソリンスタンドとか保育所とかそういったところにいって職業体験をする。地域の人たちがそれを認めて受け入れる。そういうことが実はドイツなんかでは一ヶ月くらいやられている。こういったこと、自主性とか自発性、能動性とかを作っていくのに非常大事じゃないか。総合学習とかがいわれる中でそんなことを思ってます。

北九州の社会教育をやっている山下先生が言われました公民館の役割というのは非常にあるんじゃないか。だから、小学校区、学校がひらく中で、公民館というのが大きな役割を果たすんじゃないか。日本の場合、中学校の数以上に公民館は、たんなる地域の集会場じゃなくてあるわけで、この公民館も日曜日に、ひらいていただいているわけです。ちなみに、ここは日曜日だけどこういうふうにひらくし、福岡市の公民館は小学校区に１つあって、そこの大名小学校とですね、連携をして、教頭さんがコーディネーターの係りなんかもしている。そういうわけなんですね。こうしたことは非常に必要だし、北九州の場合は中学校区ごとにそれを福祉とつながりということで、学習とか人つなぎの役割をですね、福祉部門に限定してしまう、ちょっと心配を私持っております。

時間がきたそうですね、あと２分ありますか。３番目はですね、関係を作る方法とか身近な関わりという

ことです。私は、中津市の保育園の方がいわれた、じゃあ、どのように関係を作っていけばいいのか、これは今言ったようにコミュニティ、そんなことがありますね。１つはですね、今心理学の流れで近代心理学で終わらない心理学をやっている人たちがですね、まぁ西村さんなんかもそうだと思うんですけれども、アサーティブトレーニングとかですね、参加体験型学習とかですね、子どもと子どもが共感をしてつながっていく学習をしています。学級の中ででも、そういうトレーニングはできるんです。学級の中でもそれができるし、私は学習者同士もしぜんとつながってやっていく、こういったことができるんではないかと。「ただの洋服屋」としての発言がありましたけれども、私は「ただの洋服屋だと考えた限り」ではもう知識人にはなってるんではないか、というふうに考えます。ちなみに私は、昨日が命日だった哲学者の滝沢克己という方がですね、日本100人の哲学者に入ってますけど、彼は「ただの人」ということをずっと言い続けてました。そこでの深みの中からですね、やっぱり人間としての深みの中から、じゃあ１人１人が身近な人とどうするか、例えば今日、私と来ている学生、今日ここへきてくれた学生とかですね、そういう人との関係をどう作っていくかとかが大事と思います。私の連れ合いとは、家に帰る時、今日遅くなったら、今日来た学生とちょっとコミュニケーションするから帰るときにはちょっとお土産買っていこうかなと。そしたら多分褒めてくれるだろうなとかですね、そういう関係が大事だと思います。

最後、第４点目です。17歳ということを高校の先生が言われましたけど、ほんとに作られた自分から自らを作る自分へというのは、カオス（混沌）状態であり葛藤だと思います。私なんか今でも葛藤してますけれども。その中でさっき言った方とか聞いた方とか、イノセンス（責任のとりようのない状態）という言葉を芹沢俊介氏が言っておられるんですね。じゃあ、生まれてきた自分というのは誰も責任をとりようがない。親に対してもとりようがない。そういう責任がもてないような自分が責任を問えるような形になっていく時の葛藤。これはやはり非行少年相談活動をずっと行われた方が「認める」といわれましたけど、やっぱ「認めて・褒めて・しかる」というか、そういう点で私もここで学習しました。そして共感の意識ですね。つまり共感、フランス革命の時代の思想家Ｊ、Ｊ、ルソーがいっています。人間と人間は自己愛があるけれども、実は他者愛もあるんだ。共感ということは人間の類的な存在としての本質なのだ。こういう関係性をですね、やっぱり私たちは日常の中で作っていく必要があるんじゃないかと思います。どうもありがとうございました。以上です。

上野

最後に横山先生の方から総評を兼ねてお願いします。

横山

はい。もう時間がすぎておりますが、１つ時間をいただきまして。宗教とか倫理の問題が出ましたけど、私は教育大学に赴任した時ですね、児童心理という必修授業の中で道徳の章があるんですが、当時、道徳は大切なことだと言うことすら難しかった。私は、学ばなければ遺伝的にあるわけではないんだと。何がいいか悪いか、それを教えなきゃならん。いろんな形があると思いますけど、倫理といい修身といい、言い方はいろいろあるんですけが、私は何がいいか悪いか、時代を超え、世代を超え、きちっと幼い時に教えなきゃいけないというふうに思います。ここに向山洋一さんという方で教育学関係、実践教育で有名な方です。この方は授業の教育の法則化運動ということで、それこそ10万人からの仲間たちがいるんじゃないかでしょうか。現場では、すごい活躍している方なんですが、この方が最近書かれた本の中でその道徳に関して自分は若い頃に必要ないものだと思っていたということをおっしゃっていました。そして何もしなかったと。しかし、今の状況を見て間違いだであるということがわかったということをおっしゃっておられるんですが、今では遅すぎるんですね。教えなければ学ばないのは当たり前なんです。青年期は何かに怒りをぶつけたい、自分を否定したい、そういう衝動に駆られる時期でもあるんですが、本来子どもたちは発達過程でいろんな体験をする中で自己コントロールができるようになるわけです。それができなくなってきている。この自己コントールに関わる大事な１つのポイントである、何がいいか悪いかということですね、それは人によって

それぞれだという人もいますが、私はそうは思いません。人のものをとってはいけないとか、人を傷つけてはいけないとかいくつかの点に関しては時代、社会を超えてその当たり前の事を当たり前に認識することが大事だと。それを教えられる体験がないんですね。教えられるという体験です。教えられなければ学ばないということです。ただ、強制できるもではない。しかし、道徳に関しては、社会で生きていく為に幼い時から家庭、地域、それぞれの場においてやっぱり必要なことをきちっとやっておかなければならないということを私自身は思っています。それからもう１つは人間関係の問題がいろいろでてきたんですが、身の回りことからということがありましたが、やはり子どもたちが求めているのはやっぱり人と人のかかわりだと思うんですね。人間は人と人との間で生きているわけですから、考えなきゃいけないのは身の回りから私たち大人同士が豊かな交流をする努力をしなきゃならない。まず、夫婦でしょうか。とにかくPTAなんか嫌だじゃない。子ども会嫌だじゃない。役員になるから、それは子どものためにもなりますけれども、むしろ今必要なのは大人のために必要だと思います。日本でアメリカのようにパーティーの文化がありません。しかし、溝掃除もあります。いろいろあります。私たち自身が関わりをもつ努力をすることが必要じゃないかと思うんです。大人が関わりをもたない状況の中で、子どもが関わりをもてといってもそれは無理だろうというふうに思います。幼い時からそれが必要だろうというふうにですね。それから体験についてちょっと。あちこちとんで恐縮ですが、資料をちょっと用意させていますのでごらんいただきたいと思います。これは、いろんなデータを基にですね、モデル的に過去50年間ですか。24時間の子どもの生活時間、過ごし方を図で示したものです。これは、質の問題は入っていませんけれども、単なる時間だけですが、時間だけ見てみても大きな変化が起こってきていることがわかります。例えば、睡眠時間です。これは、６年生の場合ですけれども。1947年には10時間25分、京都大学の先生たちが3600人調べて平均の睡眠時間を出しているんですが、10時間25分。91年、右の方に行きます。黒い棒のところですが、宗像市の約1000人の６年生、８時間16分という睡眠時間です。睡眠時間1つとっても、もう完全におかしい状態が起こっている。私たちはやっぱり、もちろん遊びなんかも限りなく０になってあります。そして、テレビ視聴、テレビゲームが３時間を越える状態となっています。バーチャルな体験がそこに入ってきています。お手伝い体験そういったこともももうかぎりなく０に近い状態になってきている。そういうふうに社会の様々な状態変化の中で子どもの生活が大人の生活の変化を受けて大きく変わっている。しかし、やはり考えなきゃいけないのは、先程申し上げたことですけども、現時点は子どもの生物としての本質は変わらない。だとすれば、私たちはどう踏みとどまるのか。私たちの生活が問われているのではないか、というふうに思うんですね。できることからやっぱり考えていく必要があるんじゃないかと。それから最後から２つ目ですが、時間ですけど申し上げたちことは、この体験重視ということが言われるようになってきました。それはとてもいいことなんですが、なんでも体験すればいいという問題ではない。今は「させられ体験」、「間接体験」、「擬似体験」があまりにも多いわけです。大事なのは自発的な能動的な体験です。自らの意思で自らが働きかけていく体験。痛いことは痛い、悲しいことは悲しいという体験が必要だと思うんです。それがどうも管理と保護、愛情の豊かさといったらいいんでしょうか、その中で特に欠けてきている。しかもですね、それをさらに理解しても体験が大事だといわれると、どういうふうに遊ばせようか、どういうふうに生活体験をさせていこうかなんですけれども、これが今日も会場にお見えの学会メンバーでいらっしゃる、県立大学の小松先生は連続的な体験ですかね、要するに体験はバラバラではないわけです。朝起きてトイレにいって顔を洗ってご飯を食べるという体験ですよね。お母さんお父さんとおしゃべりして「いってきます」と言って、勉強して帰ってきて遊んでお手伝いしてと流れがあるわけです。その流れという点は今日は論議になりませんでしたけれども、私たちは考えていく必要があるんじゃないかと思います。なぜならば、体験の必要性がどんどん言われるだろうと思うんです。しかし、注意がそこに必要だと。バラバラではやっぱり子どもたちは育たないということです。それから、緊急の課題としてはですね、子どもたちはやはり、自分が生きているんだ、存在しているんだという場を求め

てきているわけです。仲間を求めているわけですね。そうしましたら、やはり中学校・高等学校、普通の体験というのはどうしてもやっぱり、時間もかかり難しいのですが、当然のこととして、子ども達が子ども同士で交流したり、自分の思うことをやろう、やる場ですね、子ども達はエネルギーを持っているわけです、爆発的な。その場をやはり急いで作る必要があると思うんです。例えばその１つが、西村先生が提案されたライブですね。駅のあたりで若者がよっては、ほとんどの皆さんは聞いてくれないけれども、でも私はあれがやっぱりもっとこう温かい目で見ることが大切だと思うんです。博多の市民センターでは去年か一昨年からですかね、一大決心をされたと思うんですが、募集しまして、中学生ライブの発表会ですか、子ども達がそれを準備、実行委員会を作る、ものすごい盛り上がりを見せている。そういったことが特別な形じゃなくて日常的にできる状況ですね。子ども達がセブンイレブンの前に集ってたむろしていれば、不良だと言ってそういう目で見る。子どもは行き場がないわけですよね。したがいまして、地域の中、コミュニティーの中でも文化的なサークル活動、体育的なものだけではなくてですね、文芸とかあるいは英会話・国際交流・コンピュータ・テレビゲームがあってもいいと思うんです。とにかく子ども達が集って何かする状況をですね、なんらかの形で作る必要があるんじゃないかと思います。その中にやはりつられて来る子もいるけど来ない子もいる。子ども達は心を惹かれる。若者達は惹かれていきます。そのチャンスをやはり用意する必要があるんじゃないかと思うんですね。子ども達に任せて運営していくには、多少はリーダーシップを取るものがいるけど、後は子どもに任せる。若者の力をやっぱりそういう夢の方向に持っていく必要があるんではないかと思います。そういったことが今の日本では、若者の文化を少し、高めていくような状況が全くない。これでは、もう学校で適応できなくて、勉強で行き詰まったり他のことで行き詰まればもう行き場がない。そのあたりがもし手を打つとすればあるのではないかという感じを持ちました。申し上げたいことはいろいろありますけれども。最後にですね、父性の問題ができましたが、私は非常に自己矛盾を起こす社会状況に来てると思います。男女共同参画、あるいはフェミニズムの流れの中で、男も女も同じということをという。ところが、一方では父性が欠けてお父さんはどうなっているのかと責める。問題が起これば強いお父さんを求める。一貫性がないわけです。私達は母と父、子どもの関係はどうあればいいのか、もう１回冷静に見直す必要があるのではないだろうか。そういうふうに思います。

上野

ありがとうございました。問題が問題なだけに大変盛りだくさんなことだったかと思いますし、またフロアの方も、まだ質問したい、もっとやりとりをしたいというふうに思われた方も少なくなかったんではないかと思います。残念ながら時間がもう15分以上経過してしまいましたので、今日はこれで終了とあいなりますけれども、この生活体験学習学会というもので立ち上がったばっかりの段階でございます。９月には実践交流会というのを計画しておりますし、また来年の３月には第２回目の研究大会を開催していこうと考えているところでございます。体験というのは１回だけではなくって連続した体験が必要だっていうことがフロアの方からも出ましたですし、またこういった関わりを広げていくことが大切だという動きなども見られました。また親の価値観や考え方ってのを変換させていくっていうことが必要だということがありましたね。ぜひともこの学会主催するいろいろな企画にご参加していただければと思っております。以上を持ちまして本日のシンポジウムはこれで終わらせていただきたいと思います。